

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no. 115 Dec.

都留文科大学 地域交流研究センター 機関誌
「フィールド・ノート」no. 115 Dec. 2023

特集

「かたろうよ」



ギャラリー写真：本学にあるイチョウ。太陽に近い葉から紅葉していた(2023年11月22日)
表紙写真：仲町大^{なかつまち}神社の横にある公園。落ち葉の絨毯^{じゅうたん}が広がっていた(2023年12月4日)



FIELD·NOTE no.115 Dec.

特集

「かたろうよ」

08 みんなが集まるココニール

11 昔話の今

14 ひとりじゃできないを、みんなでやる

17 屋台がつなぐ人の輪

22 ムササビ観察日記

24 都留のツルさがし

27 走る楽しみ

30 フィールド暦

32 自分だけの感覚を磨く

35 生態系を支える

38 センサーカメラが写した動物たち

40 集う、憩う〈前編〉

42 夜の生きものを観る

45 学びから育つ幹と枝葉

48 その時々を大切に

52 都留の風景写真集



山梨県都留市
 総人口 28,875 人
 面積 161,63km²
 (2023 年 12 月現在)

FIELD・MAP

桂川をたどると

都留市には、桂川を中心とした豊かな水系が広がっています。
桂川は山中湖を源流とし、忍野村、富士吉田市、西桂町を通り都留市に流れ込みます。

おしのはつかい 忍野八海



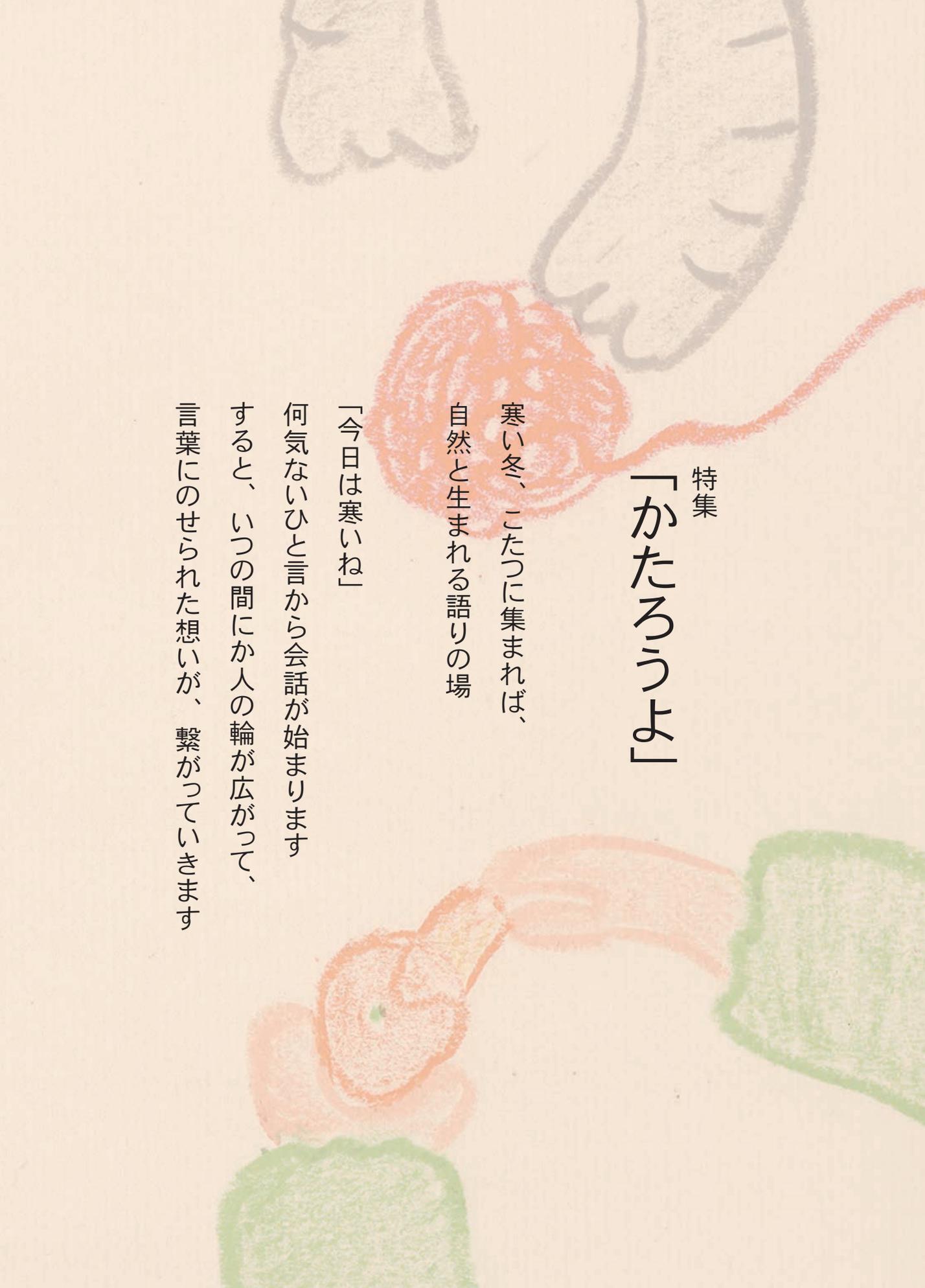
湖が時間をかけて縮小し、現在は小さな池が点在しています。富士山の伏流水が水源であり、その湧水は桂川に合流しています。

やまなかこ 山中湖



1800～1900年前ごろに、桂川が富士山の火砕流でせき止められてできました。長い時間をかけて今の大きさになりました。





特集

「かたろうよ」

寒い冬、こたつに集まれば、

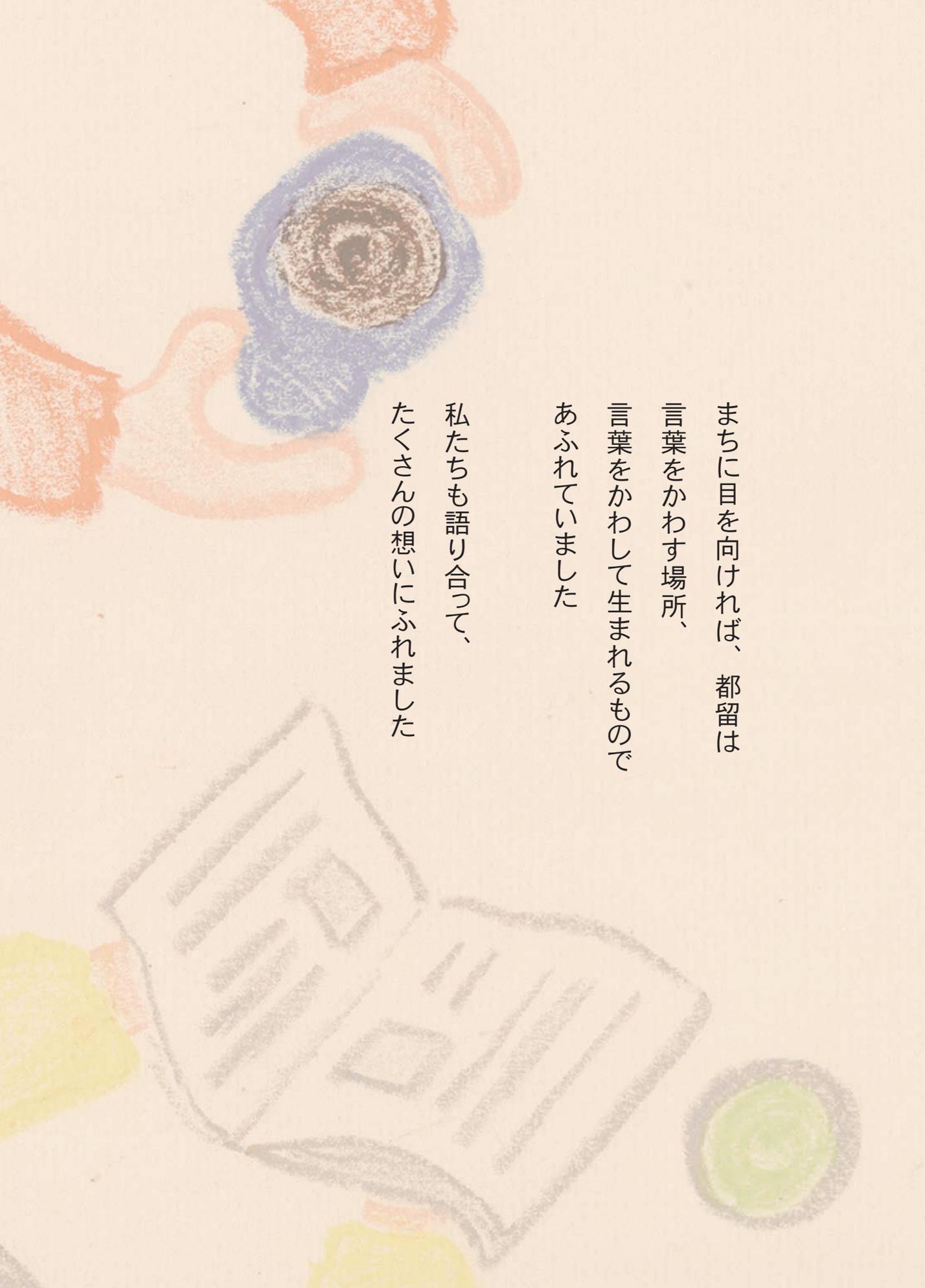
自然と生まれる語りの場

「今日は寒いね」

何気ないひと言から会話が始まります

すると、いつの間にか人の輪が広がって、

言葉にのせられた想いが、繋がっていきます



まちに目を向ければ、都留は

言葉をかわす場所、

言葉をかわして生まれるもので

あふれていました

私たちも語り合って、

たくさんのおもいにふれました

みんなが集まる ココニール

まちを散歩していると、「ココニール」という見慣れない単語が目にとまった。道路に面して立てかけられているホワイトボードを見ると、どうやら誰でも参加できるランチコミュニティらしい。食事をしながら交流を深める場所なのだろうか。気になって、訪れてみることにした。

渡邊結佳(国文学科2年)=文・写真

地域の誰もがプレイヤー

ココニールは、都留市消防署の向かいにある2階建ての建物で開催される。本当はここだよね、と少し不安になりながらそつと階段を上がっていくと話し声が聞こえてきた。「こんにちは」。緊張のせいで私の挨拶はとてもし小さい。「大学生かな、こんにちは」と返事をしてくれたのは、ココニールの活動を中心となつて行っている矢野あずみさん(44)だ。

明るく弾んだ声で迎え入れてくれた。

ココニールはどんなことをする場所なのか質問すると、「都留のお店とか、ボランティアとか、自分の活動を自由にやりたい人が来ているの。それから、気軽におしゃべりしたい人とか誰かとランチしたい人も来るよ」と説明してくださった。

部屋を見渡すと、コーヒーセットを並べている人や、野菜を売っている人、ソファに座ってパソコンと向き合っている人など、ここにいる人たちはそれぞれ違うことをしている。「ココニールは、自分のやりたいことを具現化するために生まれた空間なんだ」と矢野さんはおっしゃる。ランチコミュニティと聞いて、まちのかたが会話を楽しむだけの場所だと思っていたから、目的がはつきりしていることに驚いた。

ココニールは「ここにいる」という言葉が由来となつている。地域の誰もが主人公となり、自分のやりたいことと向き合ったり出会いのなかで気づきを発見したりできる場所を目指しているという。じつさいに、都留で活躍するプレイヤーたちはココニールでどのようなことをしているのだろう。

「どうしたいか」を話せる場所

机に並んでいる数種類のおかずと2つおにぎりの入ったお弁当がおいしそうだ。からだが自然とそちらに向かう。「こんにちは」と優しい笑顔を向けてくれたのは、「FU・RE・RU」の寺岡比呂子さん(49)だ。

私はおにぎり弁当とカボチャの梅煮を買った。いつからココニールでお弁当を売っているのか気になつて尋ねると「最初からだよね」と矢野さんに確認するようにおっしゃった。寺岡さんはココニールが始まった今年の1月からお弁当を売っている。「いつもここでお弁当を売っているよっていう場所がほしかったの。『FU・RE・RU』は店舗を持たず、寺岡さんが自ら配達してお弁当を届けていたという。しかし、お弁当を作ることと届けることを両立するのは難しく、定期的にお弁当を販売する方法を考えていたそうだ。

また、寺岡さんと矢野さんは働きかたについて同じような考えをもっており、自分の仕事をいかに楽しく無理なく続けるかについてよく話し合っていた。「好きなことを仕事にしても、生活のためにという気持ちが出て



左：お昼どきになると、手作りの味を求めてたくさんの方が来る
右上：寺岡さん。いつも笑顔で迎えてくれる 右下：大人気の車麴の唐揚げが入ったお弁当（2023年10月4日）

きて苦しくなつちやうときがあつて。それをぐつと引き戻してくれるの、あずちゃんは」。寺岡さんは矢野さんと会話をすることで、お弁当の届けかたや、どうしてお弁当を食べてほしいのかを深く考えることができたという。「私がどう在りたいかという表現方法がごはん。応援のできる、勇気づけられる、元気になるお弁当を作りたい」と寺岡さんは気持ちを確かめるようにおっしゃった。「自分がどう在りたいか」を考える機会は日常生活でそれほど多くないだろう。一人では答えを出せないこともある。しかし、ココニールは、何でも話せる場所であり、真剣に話を聞いてくれる人がいる。誰かと話することですごく多くの気づきを得られる場所だ。

「自分のまま」で居られる場所

ココニールへコーヒーを提供しにくる団体もある。コーヒーマラドは、矢野さんからの依頼を受け、月に一度美味しいコーヒーマラドを届ける。三枝浩美さん（59）と石井詩也さん（20）は、このボランティアに参加していて、活動を通してココニールを知ったという。

最初に訪れたとき、お二人はボランティア団体の一員という意識があつて肩の力がなかなか抜けなかったそう。矢野さんは「二人ともずっと立ちっぱなしで、気が張ってたよ。もつとリラックスしていい空間なのに」とその時のようすを思い出してすすつと笑った。三枝さんは、5月にはじめて訪れてから何度もココニールに来ている。「こんな場所があつたのって感じで来たよ。居心地がいい。心地いいからココニールっていうのかな」と話す。本当の由来とは違っているが、「心地いい」と「ココニール」が結びつくことに違和感はない。楽しそうな話し声と自由な雰囲気は、コーヒーマラドを提供するだけでなく、会話を楽しむことへと三枝さんを導いてくれたのだろう。「顔見知りが増えていって、おしゃべりすることも増えたよ」と言う三枝さんの顔には、柔らかな笑みが浮かんでいた。石井さんは、ココニールに来たことで人見知りや落ち着いたそうだ。「活動をしていなかったらこの場に来られなかったし、来られないと変われなかった」と話す。また、コロナ禍で誰にも会えない日々を経験したからこそ、顔を合わせることの大切さを実感してい

るといふ。表情や動きからも相手の気持ちは伝わってくるのだ。

お二人はコーヒーを提供し終わっても、すぐに帰らずボランティアの活動について話し合っていた。団体の一員でありながら、自由に過ごしているすがたはココニールの空間に溶けこんでいるように見える。

「また来たいね」と三枝さんが言う。会話を楽しもうとするココニールはどのような活動をしても、その人をあたたかく受け入れてくれる場所だ。



石井さん（左側）と三枝さん（右側）。ボランティアとしてコーヒーを飲んでリラックスしたり会話が生まれたりすることを目的に活動している（2023年10月18日）

「チャレンジ」できる場所

矢野さんは、東京で建築士として働いていたが、ゆつくり過ごせる自分の家を求めて都留へたどり着いたそう。都留へ来てからは「それぞれの心地よさを大切にする」をテーマとしたコミュニティを作ったりワークショップを開催したりしたという。きっかけは、都留を離れようとする友人の「このまちは何も無い」という言葉だった。矢野さんは「無いなら創ればいい」と強く思ったそう。都留は個人が思いつく小さなチャレンジを実現してくれる。チャレンジしやすいまちだと思う。心の奥底にある「こうしたい」という気持ちを閉じ込めたままにせず表現していくよ、と矢野さんは語りかけている。

ココニールで活動するかたや、都留で独自の活動を行っているかたからは「あずちゃん」が背中を押してくれたんだ」という声をよく聞く。矢野さんが素直な気持ちのままに寄り添ってくれるから、ココニールでは自分のチャレンジに向けて一歩先へ進むことができ。矢野さんは、誰かの「こうしたい」という気持ちに寄り添ってくれる伴走者だ。



矢野さん。どんな話でも真剣に聞かれる（2023年12月6日）

ココニールからの帰り道、金木犀の香りに包まれながら、私にとつてココニールはどんな場所なのだろうと考えた。都留で暮らすかたが集まって、訪れるたびに新しい出会いがある。会話に交ざると、熱量を分けてもらえる。ココニールで言葉を交わすことで、相手の想いに近づけた気がした。

「仲間」になれる場所、という言葉が頭に浮かんでしつくりきた。想いを理解したり、応援したりして一緒に頑張れるような人がココニールには集まっている。「ココニールの仲間たちとまた語り合いたいな。次はどんな話をしようか」誰かと話す楽しさをココニールは教えてくれた。

昔話の今

図書館で見つけた本をきっかけに、都留にたくさんのお話が伝えられていることを知った。都留に伝わる昔話の地は今、どんなすがたをしているのだろう。2つの寺社を訪れることにした。



熊太郎稲荷神社の鳥居 (2023年9月26日)

くまたろう 熊太郎伝説

昔、山の上に住んでいた熊太郎という男が狐に取りつかれてしまいました。祈禱師きとうしを呼んで狐に話を聞くと、「山梨稲荷に祀まつってくれば離れる。村にいいことが起こるときはコンコン、悪いことが起こるときはキャンキャンと鳴いて知らせよう」と言います。ある日の夜明けに狐がキャンキャンと鳴く声が出てきました。案の定、その日の夜に村が半焼する火事が起こりました。しかし、狐の声を聞いて不安に思っていた村人たちはすぐに逃げて、けが人は出ませんでした。今でも近くの水源からは水がコンコンと湧き出ています。

案内人はトンボ

熊太郎稲荷神社はどこだろう。まわりは民家と田んぼばかりだ。神社の入り口を探すため、自転車を降りてゆっくり歩く。民家と民家のあいだに「散策路」と書かれた小さな看板を見つけた。目の前に続くのは、自転車を押しながら歩くのが精一杯なほど狭い道だ。足元には砂利と陶器の破片が敷き詰められていて、じゃっじゃっじゃと軽い足音が響く。

散策路に沿うように細い用水路が流れていた。目の前を飛ぶ赤みがかったトンボに案内してもらおう。

少し歩くと、さくさくつという足音が変わる。足元を見ると杉の小枝がたくさん落ちていた。木に囲まれるようにして赤い鳥居がいくつも見えてくる。手前の鳥居には2匹の狐が飾られていて、まるで出迎えてくれたようだ。昔話とのつながりを想像して、わくわくしてくる。神社の本殿までには石の階段が10段ほどある。階段に沿って5つ並んでいる鳥



看板のそばの狐のかざり。ひっそりと見守っているような気がする (2023年9月26日)

居の後ろには「令和3年初午奉納」という木札を見つけた。よく見れば、階段に落ち葉は溜まっておらず、手入れがされている。これまで途切れることなく大切にされてきた神社なのだと分かった。何百年と時をへだて、遠い存在のように感じていた昔話との距離が近づいた気がした。

昔話と現実のはざま

社の近くの小さなベンチに腰を下ろす。石でつくられたベンチはひんやりとしていて、余分な力が抜けていくような気がする。狐が今でもこの場所に来ていたらいいのに、と昔話に思いをはせていると、あまりのかゆさに現実に引き戻される。いつの間にか腕に蚊が2匹も止まっていた。これ以上刺されてたまるものかと、腕をぶんぶんと振りながら階段を駆け降りる。

帰り道、行きと同じ狭い散策路に入る前に、神社を振り返る。朱色の鳥居が木漏れ日に照らされて放つ儚さに、思わず息を飲んだ。足元からは「コンコン」と水が流れる柔らかな響きが聞こえてくる。きつとこの音は、狐が幸せを知らせてくれている証拠だろう。

夏狩薬師

ある日、盲目の娘のもとを祈禱師が訪ねてきて「私が眼病治癒の祈禱をしよう」と言いました。母親が祈禱料を渡したあと、祈禱師はすがたを現さなくなりしました。それでも母親は毎日、薬師如来像を参拝し、娘の目は1週間後には完治しました。1年後、母親が祈禱師と再会し話を聞くと、娘の眼病を治すと嘘をついたうえに、親娘からお金をだまし取ったので、目が見えなくなってしまうと言います。母親は「娘の目が治ったので、あなたを憎んでいません。仏様はあなたをお許しになるはずだ」と言いました。その言葉聞いた祈禱師が涙を流すと、祈禱師の目に光が戻り眼病も治りました。

もうひとつの物語

夏狩薬師の物語についてお話ししてください。たのは、長慶寺住職の武藤泰道さん(56)だ。ここで、「夏狩薬師」の物語より前のお話と出会った。

江戸時代、西桂に薬師堂を建てていた家が絶え、土地にはお堂と薬師如来像が残ってし

まった。やがて、お堂ごと富士の雪解け水に押し流され、夏狩にある長慶寺の泉にたどり着く。その像を住職がすくい上げ、あらたに薬師堂を建て直した。それから毎年、縁日には祭りをおこなうようになったそうだ。そして、あらすじを紹介した谷村の娘のお話につながる。

武藤さんが本堂を案内してくださいました。本堂に入り、線香の香りが鼻をかすめる。いつも線香を焚いている祖母の家を思い出し、ふと懐かしい気持ちになった。仏壇に目を向け



薬師洗眼の水。眼鏡池という通称がついている(2023年11月23日)

ると、金と紫の幕が鈍い光を反射しながら垂れている。その下には大きな屋根をもつ厨子があつた。厨子とは、仏像を安置するための堂の形をした仏具のことだ。このなかに西桂から流れてきた薬師如来像が祀られている。

のぞきこむと、想像していたよりも少し小さな仏様が座っていた。高さは30センチメートルほどだろうか。法衣ほふいの部分は黒く、そのほかの顔や手は金色だ。流れてくるうちに法衣の塗装がとれてしまったそう。左手には薬壺いかりを持つている。この薬の効能が物語の娘に届いたのだろうか。

両脇には、薬師如来の補佐をする役割があるという日光菩薩と月光菩薩が、左右対称に祀られている。さらに、3体の仏様の前では、薬師如来を信仰する者を守護するといわれる十二神将じゅうにしんしょうが鋭い視線を放っている。瞳はガラス玉で作られていて、頭の上には干支をのせていた。これほど仏様がそろって祀られているのは珍しいという。

語りと縁

「禅宗は『縁』を大事にする宗派なんだよ」と武藤さんは話す。臨済宗のお寺はそれぞれ

祀っている本尊が違う。長慶寺が薬師如来を本尊としているように、それぞれの土地にゆかりのあるものが大事にされているのだ。今回、お話をうかがって生まれた縁もまた、私の言葉で身近な人に広がっていく。生活のなかにある縁は語りによって生まれているのかもしれない。

* * *

図書館で偶然目に入ったのは、『鹿児島のお話』という本のタイトルだった。故郷の名前が懐かしくて、思わず手にとる。そのとき、都留に来てからのほうが、地元のことを知りたいと思つていることに気づいた。次に選んだのは、都留の昔話が載っている『郡内の民話』だ。都留に来て間もない私でも、知つている土地の名前に心が躍る。

昔話の今をたどると、その物語は住宅地のなかで、お寺のなかで、しっかりと息づいていた。都留の人たちは、この地域に伝わる物語をどれほど知つているのだろうか。昔話を知つている人は少ないかもしれないけれど、この場所を大切にしている人が確かにいるということに気がついた。「知りたい」という

想いは語りに気づきつけかけになる。私は、これからどこで、誰と、何を語っていこう。すぐそばにあるものをいつもより少しだけ大切に思える冬になりそうだ。

久永奈央（地域社会学科1年） 文・写真



左：熊太郎稲荷神社の近くの用水路。近くには熊太郎水源がある（2023年9月26日）
右：長慶寺の洗眼の水のなかに咲いていたバイカモ。光を反射し、花弁の白さが際立っていた（2023年9月30日）

ひとりじゃできないを、

みんななでやる



おもちゃ病院とは、壊れてしまったおもちゃを修理する団体のことだ。都留市のまちづくり交流センターを拠点とする「おもちゃ病院ムササビ」では、不具合のあるおもちゃを元気にするため、会長の小倉潔さん（76）をはじめとする現在10名のお医者さんが活躍しているという。



毎月第3土曜日に、受付の旗を目印にお客さんが集まってくる（2023年9月16日）

都留のおもちゃ病院

全国にあるおもちゃ病院のうち、「おもちゃ病院ムササビ」は都留市社会福祉協議会の企画で2019年に始まった。都留市で行われるおもちゃ協会の講習を受け、おもちゃ協会の会員になると、おもちゃ病院の活動に参加することができる。

「おもちゃ病院ムササビ」はボランティア団体だ。電池など消耗品の購入は、市の赤い羽根募金の一部が充てられているという。修



自分のおもちゃが修理されているのを夢中で見る子どもたち（2023年9月16日）

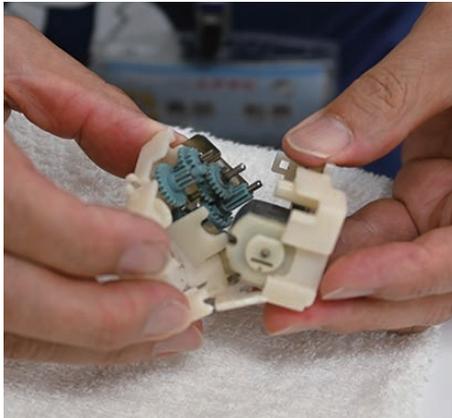
理に使う道具や工具は使い慣れたものを持参している。工具箱を見せてもらおうと、ドライバーやネジのほかに、電圧計やハンダゴテなど、あまり家庭で見かけることのない道具もあった。数本の乾電池とドライバーしか入っていない、私の実家の工具箱とは違って、機械に詳しい人しか持っていないような道具が入った工具箱は、きらきらと輝いて見えた。

おもちゃの手術

おもちゃが持ち込まれると、和気あいあいとしていた会場が手術モードに切り替わり、しんとなる。高部和男さん（69）が、電源を入れても走らなくなってしまった電車のおもちゃを修理していた。おもちゃに入っていた電池に、十分な電力が残っていることを確認してから、今度はモーターの確認作業に移る。動くおもちゃは一般的に、モーターを動力としているからだ。しかし、モーターなど動きの中核となる部品が入った箇所が開けられない。ほかのおもちゃの中に同じ作りの部品があり、比較してみる。すると、本来開け閉めができるはずの箇所が接着剤で閉じられていることが分かった。



上：おもちゃを修理する高部さん（2023年10月20日）
下：小さな部品のなかには、さらに小さな部品がたくさん入っていた（2023年9月16日）



高部さんが「バキッていつちゃつたら怖いですよ」と苦笑しながら、ドライバーを接着面に差し込む。修理するおもちゃには、おもちゃ病院に訪れた人の思い出や、元気なおもちゃでまた遊びたいという子どもたちの想いが詰まっている。人の想いが込められているものを預かる責任が、おもちゃを傷つける怖さを感じさせるのだろう。

強い力が必要だが、おもちゃの大切な体を傷つけないよう慎重に手を動かす。見ているだけの私の手も震えてきそうなほどに、緊張が伝わってくる。ゆつくりと時間をかけ、やっと接着面が開いた。電池を繋ぐと、モーターの動きに不具合はないが、モーターの先にあ

るギアどうしがうまく噛み合わず、タイヤが回転していない。7個すべてのギアを外し、はじめから組み立てるといふ。ギアは大きさまぎまで、大きいものでも小指の爪ほどの大ききだった。小さいギアはその半分の大ききで、指先でつまむのも難しそう。ギアを組み立てるときも、正しく動くおもちゃの部品を参考にする。

今回修理している電車のおもちゃは、よく修理に持ち込まれるのだそう。仕組みが簡単で、修理がしやすいと話す。それでも、細かい部品を正しく組み立てるために時間をかける必要がある。集中して作業する邪魔になつてはいけない。無事に直りますようにと祈りつつ、そつと高部さんのもとを離れた。

修理の後は

20分ほどたつて高部さんのもとに戻ると、モーターの回転音とともにすべてのギアが回っていた。できました、とほほ笑む高部さん。ここでほつと一息つく間もなく、修理した部品を電車に組み込む作業に移る。先ほど接着剤をはがした箇所にはんだづけをしてから、部品を覆うように電車の外側を取り付け

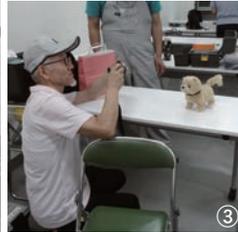
る。机に置かれた電車は、スイッチを入れるとまっすぐに進んだ。

ここでようやく、高部さんの表情がほころぶ。そして修理が完了したおもちゃを手に、ほかのお医者さんに報告しに行く。おもちゃのどこに不具合があつて、何の道具を使つてどのように修理したのかを話す高部さんは、楽しくて仕方がないといったようだった。それを聞いている人たちも、「そうだったのか」と興味津々でうなずき、「お疲れ様」とねぎらう。おもちゃ修理は修理をしている間だけでなく、それを報告し合う時間にも楽しみがあるようだ。

一人でやっても直らない

おもちゃの修理は何人か集まって、おもちゃの不具合の原因を探るところから始まる。「ここはこうしたら」、「ここは縮まりが悪いね」と意見が飛び交う。修理のめどが立ったのか、必要な道具の貸し借りをしたり、道具の使いかたを教え合つたりしていた。

モーターで動くクジラのおもちゃを修理していたグループでは、どうやらネジが外せないらしく、サイズの合うドライバーを探して



- ①話し合いながらおもちゃを修理するようす（2023年9月16日）
 ②思い入れのあるおもちゃを修理してもらった。動き出したときの驚きと喜びは忘れられない（2023年9月16日）
 ③修理が終わったあとのおもちゃのようすを写真だけでなく、動画も撮って記録する（2023年7月15日）

いた。ほかのグループの人が持っていたドラ
 イバーがびったり合った瞬間、歓声上がる。
 そのようすを見ていた高部さんは、「一人
 じゃ直せないのでからね。みんなでああでも
 ない、こうでもないと言いつつ、直つたと
 きにやりがいを感じます」とおっしゃった。
 たしかに、修理が行き詰まったときにその人
 のところへ自然と人が集まって声をかけ合う
 ようすは、一人の活動では見られない。
 「おもちゃ病院ムササビ」では、異なる経
 験を積んだ人たちが集まって協力している。
 もともと電気屋で働いていた人もいれば、自
 動車屋で働いていた人もいる。ボランティア
 でおもちゃを修理してもらったことをきつ
 けに入ったというかたもいた。
 春原^{すのはら}敏明さん（73）が、預けたおもちゃを
 受け取りに戻ってきたかたと楽しそうに世間
 話をしていた。そのようすを見て、おもちゃ
 の修理をしていた一人のかたがぼそつと言っ
 た。「すごいよね。僕にはあんなの（会話を
 広げることは）できないよ」。

ここにいる全員が、「得意」と「好き」を発
 揮して活動していた。
 * * *
 これまで私は、一人でできることが一人前
 だと思っていた。しかし、おもちゃ病院に参
 加する人を見ると、誰かがいるからでき
 ることの大切さに気づけた。「電気のこと
 は○○さんに任せるのが一番だよ」「○○さん、
 これってどうやるんだっけ」。誰かがいなけ
 ればぶつかつた壁を乗り越えられないかもし
 れないし、直つたときの喜びを共有できない。
 一人ではできないことでも、みんなで作るか
 ら楽しいと思えると、頑張りたいという気持
 ちが強くなる。
 それぞれが得意なことや好きなことを活か
 しながら、ときには足りないものを補い合う
 ために、人は集まり、語り合うのだろう。
 都留のおもちゃ病院には、おもちゃに元氣
 になってほしいという子どもたちの想いを仲間と
 ともにつなぐ人たちの姿があった。

原口桜子（学校教育学科2年） 文・写真

屋台が

つなぐ人の輪



「八朔祭のお囃子の練習を見に来ない？」。アパートの大家さんの奥さんからお誘いを受けたとき、ミュージアム都留で目にした屋台（※）が頭に浮かんだ。あの大きな屋台が、都留のまちなかを進むところを見てみたい。そんな思いから、お囃子の練習を見学してみたことにした。

花火に照らされ、屋台がいつそうきれいに輝く（2023年9月2日）

コミュニケーションの場

八朔祭は、生出神社の神様を祀り、五穀豊穰を祈るお祭りだ。その起源は江戸時代までさかのぼる。毎年9月のはじめに行われ、都留市内の4つの町が屋台を引っ張って市内を練り歩く。4つの町とは新町、仲町、下町、早馬町のこと。都留が城下町だった江戸時代のころの区割りにならって町を構成している。

大家さんの奥さん、勝又美代子さん（54）は早馬町にある嫁ぎ先に来てから、子どもたちにお囃子を教えるために毎年練習に参加してきた。お囃子には小学生や中学生も参加しているため、夏休みに入る8月から練習が始まる。

美代子さんに誘われてお囃子の練習の見学へ行く。練習は、毎晩7時半から谷村町駅近くの城南公園横にある建物で行われている。建物のなかには小学生のお子さんが10人ほどと、指導役となる大人が数人いた。子どもたちは大人の手ほどきのもと、小太鼓の練習をしていて、それに合わせて三味線の奏者が演奏している。



屋台を使ってお囃子の練習をするようす。八朔祭を間近に控え、練習に熱が入る（2023年8月28日）

子どもたちが、かけ声を発しながら叩く太鼓の音はとても力強い。元気なエネルギーがあふれ出ている。三味線の響きも耳に残る。太鼓の力強さを引き立てるような洗練された音だ。1年ぶりということもあつてか、少し手つきがおぼつかないような子どももいた。指導役の男性が笑いながら「もつと元氣よくできるんじゃないか」と子どもたちを励ますと、子どもたちは「これでどうだ」とばかりにかけ声と太鼓の音を強める。「やればできるじゃんか」と男性は満足そうにまた笑

う。子どもたちも褒められて得意げな顔になり、いつそう力をいれる。そのようすが愛らしく、私も笑ってしまう。

お囃子を聞いているうちに、あつという間に1時間の練習時間が過ぎてしまった。練習が終わっても、しばらく大人たちの談笑が続く。子どもたちは、そのあいだ公園で駆け回っていた。お囃子の練習は、子どもたちに夏の思い出を与えるとともに、大人たちのコミュニケーションの場にもなっているようだ。

欠かせない修繕

八朔祭当日が近づく8月下旬、ふたたび練習の見学へ行ってみると、屋台が運び込まれていた。じつさいに屋台に乗ってお囃子を練習するのだそう。屋台の提灯の灯りがつくと、あたりはやさしい光に包まれる。正面上部の鳳凰ほうおうなど、丁寧につくりこまれた装飾に目がいく。だが、なにより屋台本体の堂々としたすがたに圧倒された。屋台自体の大きさもあるが、やはり八朔祭のシンボルとしての大きな存在感がある。

大きくて立派な屋台は、簡単にはびくともしないように見える。しかし、屋台保存会

長の外川英敏とがひでとさん（71）は「修繕は怠れない」と語る。「今使っている屋台はね、2年前くらいに修理したんだよ。提灯や太鼓なんかも新調してね。屋台も太鼓も生きものだからね」。屋台の維持について教えてくれる外川さんの目は真剣だ。「楽しい祭り」のうらで屋台維持のために苦勞をされているようすがうかがえる。

屋台の修繕には多くの時間やお金がかかっている。外川さんたち早馬町のみなさんがさまざまな努力をして維持していることを思うと、より屋台に親しみが湧く。

時代の変化とともに

八朔祭は盛り上がりを見せるいつぼうで、年々若者の参加が減ってきているそうだ。外川さんは「うち（八朔祭）はお年寄りから子どもまで地域一体でやっている。田舎のいいところだよ。お祭りを通して子どもたちが地域を知る。でもやっぱり最近若者が減っている。お祭りはみんなでやるものだからぜひ来てほしい」と語る。

例年、本学の留学生が八朔祭に参加して屋台を引っ張っているが、早馬町は他の町と比

べて人手が多いため断っていた。将来の人手不足に備え、今年は本学の留学生の参加を受け入れたそう。外川さんは時代の変化に合わせて祭りの存続のために力を尽くしている。八朔祭の存続を願う外川さんの熱意が話から伝わってきた。

「せーの」

八朔祭当日、私も早馬町のはつぴをまとい屋台を引っ張った。町の外からやってきた私にみなさんが話しかけてきてくださるのが、早馬町の一員になれたようで嬉しい。初心者だからと一歩引いた心持ちでいたが、背中を押されたような気がした。

屋台から伸びる紅白の綱を町のみんなで引っ張る。屋台は約1200キログラムあり、そのうえお囃子を演奏する人たちが乗っているのでも重い。しかし、一度動き出すと、案外軽い力で引くことができる。みんな力いっぱい引くので、ときどき「速い速い、少し抑えて」と指示がとぶ。屋台は大きく、引きかたによっては事故につながることもあるため、気を引き締めて紅白の綱をぎゅつと握りなおした。



方向転換で、屋台を持ち上げるようす。見物する人びとの視線が集まる (2023年9月3日)

自動車のようにハンドルがあるわけではないので、交差点を曲がる時もひと苦労だ。一度屋台を持ち上げ、車輪を浮き上がらせたうえで方向転換をする。持ち上げるときは、「せーの」とかけ声を出して、息を合わせる。大勢で協力し合いともに汗を流すことで、お祭りは盛りあがっていく。

八朔祭を楽しみ、ともに手を取り合う早馬町のみなさんの表情は、とても生き生きとしていた。そのやわらかな表情から、長い時間をかけて育まれた信頼関係が垣間見える。

* * *

早馬町のみなさんからお話を聞くと、八朔祭をとっても誇りに思っていることが伝わってくる。また、練習でも本番でも、屋台のまわりには子どもから高齢のかたまでさまざまな人が集い、語りあっていた。こんなにも和やかな集いが生まれるのは、お祭りや屋台が、ただ文化としてあるのではなく、人と人をつなげる力をもっているからだろう。伝統を大切にしているっぽうで、早馬町のみなさんは新しく参加した私のことを快く受け入れてくださった。「来年も来てね」と声をかけてくださったかたも多い。

お囃子の練習を見学して、都留に受け継がれる文化に触れ、ひとりの住民として都留への親しみが深まった。同じ町内のかたと顔見知りになり、ともに屋台に集うことで、早馬町を自分のまちだと胸を張って言えるようになった。きつと八朔祭は、これからも伝統を尊び受け継ぐ心や人の輪の温かさを、地域に生きる人たちに伝え続けてくれるだろう。

北原日々希 (地域社会学科1年) 文・写真



特集

「かたろうよ」

「かたる」という言葉は
「集まる」「仲間になる」
という意味でも使われるそうです

都留の「かたり」に加わることで
繋いでいきたいものがたくさんみつかりました

集まった人のありのままの魅力を引き出す場所
昔話と自分を重ねて、地域を大切にすること
ひとりひとりが得意なことを生かすおもちゃ修理
受け継いだ伝統を次へ伝える人たち

想いを共有することで生まれる「かたり」が
都留というまちの
あたたかさになっているのかもしれない

さあ 一つのこたつに集まって
「かたろうよ」

ムササビ観察日記



本学では都留のシンボルであるムササビの観察を行っています。キャンパスのうら山に2008年に巣箱を、2013年にムササビライブカメラを取り付けました。本学ホームページ (<https://www.tsuru.ac.jp>) では『ムササビ観察日記』のブログを更新しており、ムササビのようすをご覧いただけます。今号では、ムササビの出産と子育てのようすをお届けします。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真

8月17日

ムササビの出産

交尾期：11月～1月、5月～6月

出産期：2月～3月、9月～10月

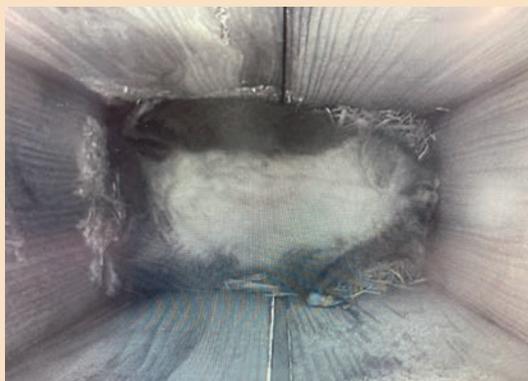
妊娠期間：約74日

哺乳期間：約90日

ムササビは一度の出産で1～4匹出産します。

【参考書籍】『くらべてわかる哺乳類』

小宮輝之 2016年



ムササビが、出産のため巣箱に入りました。仰向けに寝て出産の準備をしています。

8月18日



赤ちゃんが1匹生まれました。お母さんのからだと比べるとはるかに小さいです。

8月18日



2匹目の赤ちゃんも無事に誕生したようです。2匹の赤ちゃんのすがたが確認できます。

寝る子は育つ

8月20日



お母さんと2匹の赤ちゃんが寝ています。お母さんのおなかの上は落ちつきます。

9月3日



赤ちゃんたちでお留守番です。樹皮を細かく裂いたベットの上でまるまって眠っています。

子育てにふんとう中

8月21日



おとなのムササビ2匹と赤ちゃんのムササビ2匹で巣箱の中はいっぱいです。

9月1日



赤ちゃんが生まれてから、お母さんは外のようすが気になってしかたありません。



クズにおおわれた電柱（2023年9月24日）

都留の

ツルさがし

なぜ「都留」という名前なのだろう。市名の由来が気になって、市のホームページをのぞいてみた。どうやら、富士の裾野に広がる地形を、植物のツルが伸びるようすに例えたことが由来のひとつらしい。では、このまちには、じっさいにどんなツル植物が活着しているのだろうか。ツル植物をさがして、本学うら山を中心に歩いてみた。

印南響（比較文化学科1年）＝文・写真

身近なツル植物

ツル植物とは、茎や幹で自立して生えずに、ほかの植物や物に巻きついたり、這ったりして生長する植物のことだ。そうした植物といえ、私はまっさきにクズを思い浮かべる。夏になると、草むらや空き地など、いたるところで緑色の葉をわさわさと茂らせているからだ。

7月下旬、うら山へ向かう坂道をのぼっていく途中に、青々としたクズを見つけた。山の斜面から道路のほうへ今にもあふれだしそうに生えている。木におおいかぶさるように葉を広げているので、木の葉とクズの葉の境目がわからない。よく観察してみると、クズの葉は3つに切れこんでいる。1枚1枚が大きくて立派だ。赤紫色や紫色の花も咲いている。花びらの中心にぼつんとある黄色が華やかだ。

9月下旬のある日、道沿いの木に巻きついていくクズに近づいてみた。すると、すぐ下の地面に豆がたくさん落ちていた。花が枯れて豆ができていたようだ。枝豆によく似た形だが、中身が入っていないのではないかと思うほど平べったい。さや全体に濃い茶色の毛がびっしり生えていて、ちぢぢと手をくすぐる。茶色の毛は、



地面に落ちていたクズの豆。触ると、かさかさとした音を立てた。時間が経つと、さやは黒くなる（2023年10月10日）

手のなかで日差しを受けてきらきらと光った。あたりが暗くなってくると、クズの葉におおひ隠された木や電柱の輪郭が黒々と浮かび上がってきた。昼間のはっきりした色合いとは大違いだ。別の巨大な植物がそびえ立っているかのように、少し怖い。これは夏にだけ出現する怪物で、葉っぱでできたしっぽを引きずり、夜に動き出すのではないかと想像がふくらむ。

ひとつの植物でも、観察する季節や時間によつてさまざまながたを見せてくれる。特徴をあらたに見つけるたびに、図鑑と答え合わせをしているようにどんどん楽しくなってくる。



右：木に巻きついているフジのツル。まるでヘビのようだ（2023年10月10日）

左上：ツタが枯れたあとでも吸盤が電柱に残っている（2023年11月4日）

左下：紅葉したツタウルシの葉。手に取ってみたいくなるが、かぶれることがある（2023年10月16日）

伸びるための工夫

数あるツル植物のなかでも、フジを知っている人は多いかもしれない。春になると、薄紫色の花をいっせいに咲かせる植物だ。都留の新緑の山のところどころに見える紫色には、心が浮き立つ。

うら山に入ると、木に巻きついたフジのツルがよく観察できる。途中でねじれているものや、周囲の木と同じぐらい太いものも見つかる。ある木の幹には、かつてフジが巻きついていた跡がくつきりと残っていた。ぎりぎりとしめつけられていたようだ。線状の深い溝がついた幹は、どこか痛々しい。藤棚のように管理されていないフジのツルは、生命力にあふれていた。

しかし、ツル植物は必ずしも巻きついて伸びるものとは限らない。たとえば、ツタという植物は、吸盤をつかつて電柱や柵を這いのぼる。ツルから吸盤をいくつも伸ばし、張りつきながら生長していくのだ。柵を這うツルをつまんで引っ張ってみても、簡単にはがれないほど強く張りついている。

いっぽう、カナムグラは別の方法で伸びていく。緑色の葉を茂らせて柵に絡んでいるだけか

と思いきや、よく見ると、そのツルにはたくさんトゲがある。トゲを使うことで、からだをより強く固定できるのだろう。毛にも見える細かいトゲを指でそっと触ってみると、なかなか痛い。知らずにカナムグラの近くを通ったら、服の袖を引っかけてしまうかもしれない。カナムグラの葉を見ると、ふちにギザギザの切れこみがぐるりと入っている。心なしか、ギザギザの葉にも近寄りたくない印象をいだいてしまう。

ツル植物が伸びていくための方法には種類がある。同じ植物なのに、どうしてこんなに違いがあるのだろうか。それぞれの細かくて見事な工夫に目をみはつた。

見上げてみると

うら山で、ツタウルシというツル植物を見つけた。立ち並ぶスギの木の幹に張りついている。色や質感までがスギの幹に同化していて、ほとんど目立たない。気がつかずに、そのまま通り過ぎてしまいうさだ。近づいて見てみると、太いツルから細い根を無数に伸ばすことで、スギの幹にからだをがちりと固定している。真横から見ると、ツルと幹のあいだはわずかな隙間

もなく、びったりと張りついている。

ツタウルシは、どのくらい上まで伸びているのだろうか。ツルを上に向かって目でたどっていくと、途中でスギの葉に隠されてしまう。そこで、はるか頭上をおおぎ見ると、青く晴れわたった空に、さえた赤色の葉がゆれていた。目立たない色のツルとはうつつかわつて、日光を透かしたあざやかな赤色だ。

足下に視線をうつすと、茶色の落ち葉がいっぱい積もった地面にも、ツタウルシの葉が落ちていっている。光が差しこみにくい山のなかで、ひときわ目立つ赤色だ。木の幹をひたすらのぼりつづけて茂らせた葉は、秋になって紅葉する。そして、風に吹かれてひらひらと地面に落ち、大地の栄養になっていくのだろう。空の青さとスギの葉の緑色、ツタウルシの葉の赤色にうつとりする。顔を上げてはじめてみることで、景色をしみじみと眺めた。

ツルに実る

道路わきの茂みのなかを探していると、木の枝に絡みつくアオツツラフジを見つけた。葉のあいだからひっそりと実をのぞかせているようすが、なんともかわいらしい。小さな実が集まっ

た房が、ツルにいくつもついている。紺色の丸い実は、表面がうっすら白っぽい。ブルーベリーやブドウの実によく似ている。触ってみると、すべすべしていた。

意外なことに、このアオツツラフジの実には毒がある。果物に似たおいしそうな見た目からは想像がつかない。かわいらしい見た目に反して、生き抜くすべをしつかり身につけているのだ。愛らしさとしたたかさを合わせもつアオツツラフジに、私はますます惹きつけられる。

アパートが見下ろせる道路のそばには、アケビの実がなっていた。ツルは木の幹をらせん状にのぼり、枝にまで巻きついている。たくさん実をさげていて重そうだ。実を枝から切り取って手のひらに乗せると、ひんやりとした。熟し



アオツツラフジの実。なかに入っている種子はアンモナイトのような形をしている(2023年9月24日)

た大きな豆型の実は、くすんだ紫色の皮が割れて、ぱかっと開いている。中心にある白い果肉は、たくさん黒い種を包んでいる。食べてみると、ほんのり甘い味がした。きつと鳥や動物にとつてのごちそうなのだろう。

どのツル植物の実も、色や形、大きさがさまざまで、見つけるたびに心が躍る。ぱつと目を引くところにはないぶん、思いがけないところで見つけるとなんだか誇らしい。

* * *

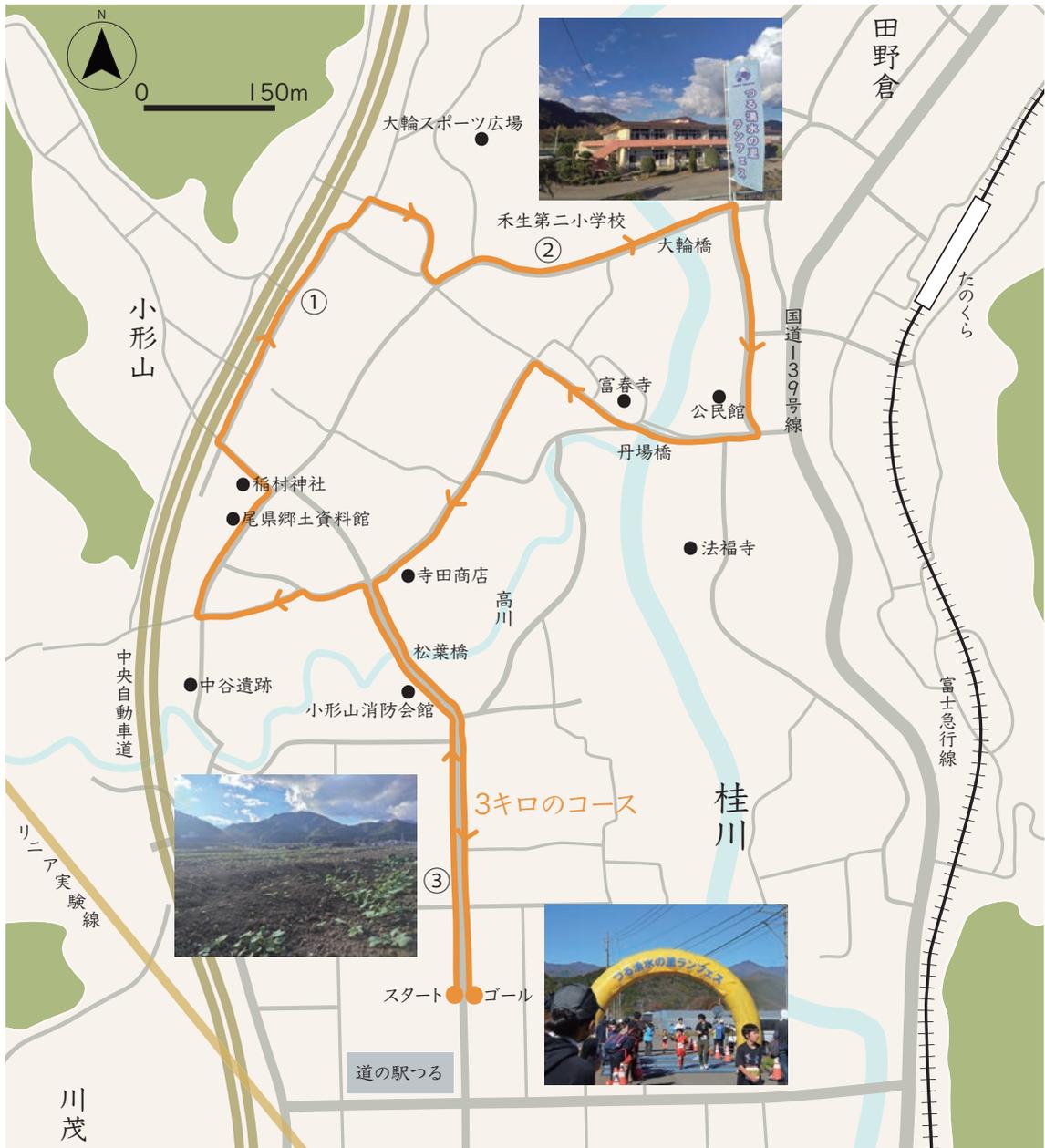
茂みのなかに、電柱に、建物の外壁に、つい見落としてしまいそうなところにもツル植物は生きている。身近にひそむツル植物を見つけたのは、かくれんぼのようでおもしろい。植物の小さな工夫やきれいな実を見つけたときは、隠れた宝ものを見つけたようでうれしい。そして、誰かに自慢げに教えたいような、私だけの秘密にしておきたいような気持ちにもなる。

遠くから眺めてみたり、顔を近づけて触ってみたり。距離を変えるだけで、気づきが増えていく楽しさがある。名前は何というのだろうか。どんな花を咲かせて、どんな実をつけるのか。身近なツル植物にますます興味がわいてきた。

走る 楽しみ

中高で陸上部に所属していた私は「都留を走ろう」と思
いたち、11月に行われた「第2回湧水の里ランフェス」
に参加した。夏から秋にかけて3キロのコースを歩いて
感じたこと、そして大会当日のようすを記録する。

村井開（地域社会学科2年）=文・写真
北原日々希（地域社会学科1年）=写真



ランフェスが開催される「道の駅つる」と山の景色を楽しめる3キロのコースの周辺マップ

まちの風景を楽しむ

そよ風が心地よい10月中旬の朝、本学から大月方面へ6キロほどのところにある「道の駅つる」を目指す。練習もかねて電車を使わずに走っていきこう。ランニングはいつぶりだろうかと考えながら、都留市役所の横を流れる家中川に沿って進む。思っていたよりも身体がなまっついていて、なかなか前に進まない。だんだんと足取りが重くなってきたので、少しペースを落として水路の流れにあわせて走ってみる。まるで、私も水路を流れているような感覚になり、さつきよりも足取りが軽くなった。澄んだ水のなかには水草が生え、水辺の生きものが集まる。そして、流れる水の音が都留のまちなぎやかにしている。

1時間ほどで「道の駅つる」に到着した。今度は、出場する3キロのコースを歩いてみよう。夏休みにも3回ほど自転車で見学をした。そのときに、したたる汗を拭いながらペダルを漕いでいたのを思い出す。ふと、山を見ると初夏に若葉が茂っていた山肌も濃い緑色になっていた。しばらく進み、中央自動車道に並行する道(※①)を歩く。耳を澄ませていると、

草むらから虫の鳴き声が聞こえてきた。ころころというコオロギのような鳴き声に、ぴーぴーとかすかに鳴く虫の声が重なる。コオロギは夏の虫のはずだが、日当たりのよい場所はまだ暑いから鳴き声が聞けたのだろう。

さらに進むと、禾生第二小学校(※②)のうすいオレンジ色の校舎が見えてきた。遠くには、岩殿山が岩肌をのぞかせている。夏に子どもたちが元気に泳いでいた学校のプールも、にごった緑色になっていた。校庭には誰もおらずがらんとしていたが、校舎の横道を通ると、子どもたちの元気な声が聞こえてきた。

そこから1キロほど歩き、スタート地点の近く(※③)まで戻る。「道の駅つる」の周りには、田んぼや畑が広がっていて、そのあいだを水路が通っている。周りの山々が見え、土の香りがする空気を味わうことができる。ここは私のお気に入りの場所だ。

何度もコースを通るうちに、畑の一角や民家の庭先で花が咲いているのが目に止まるようになった。気づけば、まちを観察するたびに季節によって変化していく花々を見るのが楽しみになっていた。コースの周辺は、天気がよく日も、すれ違う人はまばらだ。しかし、まち



ピンク色のリコリスの花。ランナーを応援してくれているようにも見える(2023年10月29日)

にさみしさがなく、きつと、畑や庭先に花を植えたかたの、花を大切に温かみを感じるからだろう。ランフェスでこのコースを走るのは期待が膨らむ。

都留で走る楽しみ

11月19日の日曜日、大会の当日は曇りではない快晴だった。朝は肌寒く、ウインドブレーカーを着て会場の「道の駅つる」へと向かった。開会式の間にあわせて到着すると、すでに多くのランナーが集まりウォーミングアップを始めていた。久しぶりの大会という緊張と、寒



3キロのスタートを待つ多くのランナーたち。中央には仮装しているランナーのすがたも見える（2023年11月19日）

さで身体が震える。さつそく、私も準備体操とジョギングをして身体を温める。

スタートの15分くらい前から参加者がスタート地点に並びだす。3キロのコースは親子で走ることできる。そのため、子どもから60代くらいの人まで幅広い年代の人が参加していた。となりにいた中学生に声をかけてみると、東京から来たという。市外からの参加者も多いらしい。また、周囲からは、はじめて会った人どうしが会話をしているのが聞こえてきた。誰かと競争するのではなく、参加者がみんなで走ることを楽しもうとしているようだ。

合図とともに、ランナーが一斉に走り出す。下見に来たときは、広いと思っていた道も今日はぎゅうぎゅうだ。稲刈りが終わり茶色になった田んぼを抜けて、民家が並ぶエリアを走る。沿道のかたの「がんばれ。ファイト」という声が聞こえる。普段は見られない地域のかたの顔を見ることができたのが印象に残った。起伏の激しいところが多く、走るのが苦しい登り坂では、とくにその応援の声が私の背中を押されてた。

* * *

久しぶりに全力で走ったので、ふくらはぎがぼんぼんに張って、ゴール地点で倒れこんでしまった。小学生の男の子が「大丈夫ですか」と声をかけてくれた。やさしい心遣いが身に見える。

3キロを走り終わり、飲み物と温かい豚汁をいただく。しばらく身体を休めたあと、更衣室で着替えをしていると仮装ランナーとして走っていた男性が入ってきた。「おつかれさまです」と声をかけると、衣装のチャックをあけながら返事してくれた。まるでサウナから出てきたかのように汗だくで、「暑い、暑いなあ」

と言いながらタオルで汗を拭いていた。

都留市に住んでいるという男性は、昨年もうンフェスに参加されたそう。「僕も都留に住んでいまして」と話すと、疲れているにもかかわらずやさしく話をしてくれた。男性はぐつたりとしたようだったが、「やあ、都留っていいところだね」としみじみと、そして力強く語っていた。

足元には水路が通り、豊かな自然に囲まれたまちからはそこで暮らす人々の息づかいが聞こえる。そんな日常の光景を楽しめるのが、都留を走ることの魅力だ。ランフェスでは、声をかけてくれる人や沿道で応援してくれる人がいて、人の温かさが身にしみた。「いいところ」という言葉には、都留を走る楽しさがあらわれているようだった。自然や素敵な人に出会えるのが都留を走る楽しさだ。

第2回 湧水の里ランフェス

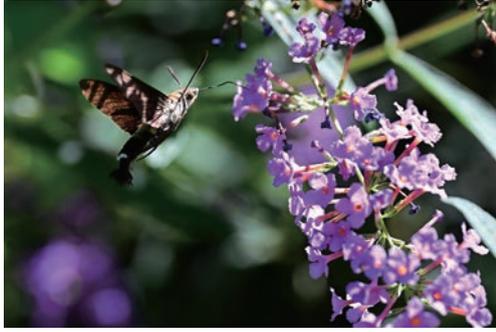
日時：2023年11月19日

定員：1500名

場所：道の駅つる

種目：10キロのコース
3キロのコース
親子ファミリーの部
(3キロ)

※来年はコースが変更される見込み



スズメガの仲間 (2023年9月5日、4号館前)

成虫の翅は三角形をしていて、高速で飛行します。空中では飛びながら長い口吻で蜜を吸います。写真は、ブドウの蜜を吸うスズメガの仲間です。



アカボシゴマダラ (2023年9月29日、4号館前)

都留市ではここ数年で、すがたをよく見かけるようになりました。幼虫は、オオムラサキと同じエノキの葉を食べ育てます。後翅の赤い斑紋が特徴です。



ウバユリ (2023年11月18日、本学うら山)

本州、四国、九州に分布します。ユリに似た花をつけます。キャンパス周辺でも日陰を中心に見かけます。果実には扁平な種子がたくさんできます。



ツマグロヒョウモン (2023年10月1日、本学うら山)

ススキの上でツマグロヒョウモンが翅を休めていました。見えているのは翅の裏側で、翅をひらくとオレンジ色を基調とした鮮やかな模様を見ることができます。

フィールド暦

夏から秋になるにつれて、生きものたちはどんなすがたを見せてくれるのでしょうか。2023年9月から11月に、キャンパスとその周辺で出会った生きものたちを紹介します。

フィールド・ノート編集部 文・写真



ヤドリギ (2023年11月18日、本学うら山)

キャンパスの自然科学棟の裏にあるサクラにヤドリギを見つけました。巣のような形状で寄生する植物です。キンジャクなどの鳥がよく集まります。



ハイタカ (2023年9月27日、5号館前)

地面にうずくまっていた。近くにはキジバトの死体がありました。ハイタカがキジバトを追いかけている途中に、2羽とも窓ガラスに衝突したようです。



アズマヒキガエル (2023年10月10日、本学うら山)

都留市では、「ごんべえ」と呼ばれていたようです。繁殖期以外は、水辺から離れた森でよく見かけます。日本固有のヒキガエルです。



ヤマカガシ (2023年10月10日、本学うら山)

遊歩道を歩いているときに会いました。カエルを好んで食べるヤマカガシが、アズマヒキガエルを飲み込もうとしています。



イチョウ

(2023年11月18日、自然科学棟前)

イチョウは恐竜が生きていた中世代から生き残っている裸子植物で、「生きた化石」とも呼ばれています。葉や幹には毒があることも特徴です。また、秋になると独特なおいのする種子を地面へ落とします。

本学のキャンパス内には多くのイチョウの木があります。私たちがイチョウの木が紅葉するようすを見て、季節の移ろいを楽しんでいます。今年は風が強い日が多く、写真のイチョウの木も数日後には、葉がほとんど落ちていました。





自身が修理をしているように「かっこいいでしょ」とつぶやく川辺さん。ふいに見える余裕のある表情が良い（2023年10月11日）

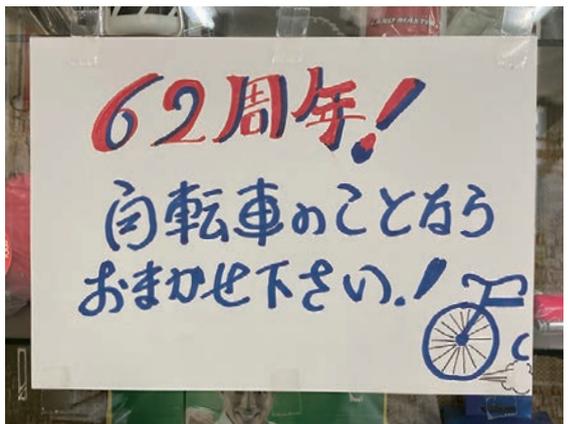
自分だけの感覚を磨く

大学生になり、移動手段として自転車に乗る機会が増えた。私は青色が映えるかわいらしい自転車に乗っている。いつも乗る自転車のメンテナンスをしたくて、友人から教えてもらった「サイクルセンター川辺」という自転車屋を訪れた。

向き合い続けてきた目

「サイクルセンター川辺」は三町商店街のうら道にある。ここでお店を営むのは、川辺健一さん（84）だ。本誌89号では、「アートの届ける山野草の魅力」について取り上げられている。お店の奥に進むと川辺さんが描いたママシグサの絵が飾られている。本誌の過去号も置いてあり、本誌を大切にしてくれていることが伝わってきて嬉しくなった。

さつそく自転車を見てもらう。一か月ほど前に後輪がパンクしてしまった。修理が得意な友人に直してもらったが、念のため、もう一度見てもらうことにする。川辺さんがパンクした箇所を見て、「大丈夫だよ」とおっしゃった。ほっと胸をなでおろしていると、川辺さんが自転車のカゴに手を置く。「ここ曲がっているね」。どこが曲がっているのか私には分からない。どうやらハンドルステム



川辺さんが書く文字の力強さと、言葉選びに頼もしさを感じる（2023年12月4日）

という部分が曲がっていたらしい。ハンドルステムはハンドルバーを支えるパイプ状の部品だ。この部分が曲がっているとうまくバランスを取ることができず、走りにくくなってしまふという。毎日乗っている自転車なのに、曲がっていることに気づかなかった。川辺さんがすぐに異変に気づいたのは、長いあいだ自転車と向きあつてきたからにちがいない。お店の奥のショーケースに、赤と青のペンで「62周年!」と書かれた張り紙を見つけた。こんなにも長く都留の人びとに愛され続けているのには何か秘訣があるのだろうか。

練習を積み重ねてきた手

川辺さんは都留で生まれ育ったそう。13歳のころから見習いとして、近くにあった自転車屋に通い続けていた。中学生だった川辺さんは、学校と自転車屋を往復する毎日だったそう。見習いのあいだは自転車の組み立てや修理をしていた。お店に自転車を発注したときに、すでに組み立てられた状態になっている今とは違い、当時はすべての部品を一から組み立てる必要があった。「今の人は組み立てかたを知らないし、できないよね」。部品を一から組み立てる技術は、当時から職人しか持っていない強みなかもしれない。

もつとも組み立てが難しい部品についてうかがう。川辺さんは後ろを振り返りながら銀色の筒に入ったスポークと呼ばれる部品を指さした。スポークは車輪に使われる細長い棒状のパーツだ。何本にもわたるスポークを組み立てるのに、一輪だけで1時間30分から2時間はかかるという。スポークの数の多さと、費やす時間の長さに頭がクラクラする。今では慣れた手つきの川辺さんも、何度も練習を重ねて自分の力だけで組み立てられるように

なったそう。「最高に難しい」と眉をへの字にして言う川辺さんから、組み立ての難しさが伝わってくる。どんなに難しいことも練習を積み重ねていけば、できるようになるかもしれない。

耳で探る

先日の取材の終わりに、川辺さんが私の自転車のチェーンが緩んでいるとおっしゃった。そのため、自転車のチェーンを見てもらうために、ふたたび川辺さんのもとへ訪れる。川辺さんに挨拶をすると、優しい笑顔で迎えてくださり、私も朗らかな気持ちになった。

川辺さんに自転車をお渡しする。すると、川辺さんは自転車を軽く持ち上げ、地面に置く動作を数回繰り返す。何をしているのか不思議に思っていると、チェーンケースについているネジをドライバーで緩めはじめた。ケースで隠れていたチェーンが顔を出す。チェーンはここにあったのかと驚くとともに、私も自転車のことを少しづつ知ることができているような気がして嬉しくなった。川辺さんが後輪のタイヤを回してチェーンの動きを確かめている。

5分も経たないうちに川辺さんはチェーンケースを元に戻す。最終確認のため、足でペダルを踏んでタイヤを回したり、はじめに行った自転車を上下に動かす動きをしたりしている。なぜ、このような動きをしているのだろう。「チェーンが緩んでいると、(チェーンが)上下に動いて音が鳴るんだよ」。緩みを確かめるために聴覚を研ぎ澄ませて、聴こえてきた音を頼りにするのかとはっとする。修理と聞くと、じつさいに目で見て原因を探ることが主なやりかただと思っていた。耳も大事な道具のひとつになると気づかされた。



サイクルセンター川辺で自転車を購入したかたがたの集合写真(2023年10月11日)



①メガネを使ってボルトを締めているようす (2023年10月11日)
 ②川辺さんの工具たち。はじめて見る工具ばかりで目を惹きつけられる (2023年10月11日)
 ③手にとってみると思っていたよりも重く感じた (2023年10月11日)

共に歩んできた工具

お店に入っすぐ左手には小ささまざまな工具が並ぶ。私はペンチとドライバーしか知らない。たくさんある工具を眺めて、どんな名前なのか、何に使われるのかイメージを膨らませた。

そのなかで、銀色で棒状の、両端に大きさが異なる丸い穴が開いている工具に目が留まる。川辺さんにこの工具の名前をうかがうと、「(工具の)メガネだよ。一番小さいものから大きいものまで6つある」とおっしゃった。メガネはボルトやナットと呼ばれるネジを緩めたり、締めつけたりするための工具だそう。工具だから堅苦しい名前だと思っていたが、意外にもかわいらしい名前だ。

ここに並んでいる工具はすべて、川辺さんがお店を始めたころから使い続けているものだという。62年も使い続けていると、どこか壊れてしまったり使いものにならなくなったりにしてしまいうさだ。しかし、それぞれの工具はたくさん使った跡を残しつつも、きれいに置かれているようすから川辺さんが工具を大切に使用していることが伝わってきた。

* * *

自転車直すためには工具だけが必要だと思っていた。川辺さんが自転車と向き合っているすがたを見て、工具だけでは自転車を直すことができないことに気がついた。不具合の原因を正確に見つける目、道具を使いこなす手、自転車の調子を確かめる耳、こうした感覚も目には見えないけれども大切な工具になるのだ。

これらの感覚は誰もが持っている。しかし、これまでに自分が関わってきたことや、関わってきたことに対してかけてきた時間によって、感覚の在りかたは人それぞれ変わってくるのだろう。川辺さんは長いあいだ、たくさんの自転車と向き合い続けてきたことで、川辺さんにしか発揮することのできない感覚を磨き上げることができた。

私もこれから出会うかたや、予想もできないようなあらゆる経験を糧に、自分が持っている感覚を磨いていきたい。ひとつのことに向き合い続ける川辺さんから、自分だけの感覚を磨いていくことの大切さを学んだ。

原優希 (国際教育学科2年) 文・写真

生態系を支える

都留には多くのキノコが生えている。身近でキノコ探しをしてみたいと思い、「きのこの教科書」という本を取った。どうやらキノコには生態系を支える役割があるらしい。じっさいにキノコの役割を観察するためにうら山へ向かうことにした。

小さな分解者

7月下旬、青空の広がる晴天のもと、キノコを探そうとうら山へ向かった。山のなかには、森が日ざしを遮ってくれているため、夏なのに涼しくて心地がいい。

観察を始めてすぐに、オレンジ色をした小さなキノコが、倒木の表面に沿うようにして生えているのを見つけた。その小ささと数の多さに見入ってしまう。すると、同行していた本誌の発行人である北垣先生が、近くに生えている色あせた木を指して、「キノコは朽ちた木を分解する役割を担っているんだよ」とおっしゃった。



数えきれないほど多くのキノコが、倒木に密集するように生えている。ヒメカバイロタケだと思われる（2023年10月3日）

木の根元に近い部分を見ると、木の皮のわずかな隙間から、コフキササルノコシカケだと思われるキノコが、木に密着して生えていることに気づいた。平たく、クリーム色と赤茶色のような色をしている。脳裏に「キノコは生態系をコントロールする」という本で読んだ言葉が浮かんだ。

キノコは枯れ木に入り込み、キノコの細胞である菌糸を巡らせ、木を分解し、エネルギーとして吸収する。そして、そのエネルギーをもとにキノコ自身が生長するという。その過

程が今、自分の目の前で起きている。本来の役割を間近で見ると、ふだん「きれいな色をしている」という感想をもつだけだったことや、キノコ本来の働きが分かっていたことが気づく。森の循環を助ける役割を担ってくれているキノコたちに感謝を伝えたい。キノコの生態についてより詳しく知りたくなった。

場所を選んで生きる

雨が降った翌日、うら山へ向かう。湿気を肌で感じながら歩いていると、足下の落ち葉の隙間から小さな白いキノコがたくさん生えていることに気づいた。まだまだ生長しそうなキノコだ。写真に収めようにも小さすぎてピントが合わない。倒木の陰では、クリのイガの部分からキノコが生えているのを見つけた。このようなところからも生えてしまうのかと興味が増す。

奥に進むと、日当たりのよい急な斜面で、キホウキタケだと思われるキノコを発見した。黄色で珊瑚のような見た目をしているため、落ち葉の上だとよく目立つ。はじめて図鑑以外で見ることができた。北垣先生がおつ



キノウキタケだと思われるキノコ。森のなかでひときわ輝きを放っている (2023年10月3日)

しやるには、このキノコは、毎年この森のこの斜面でのみ見つけられるという。私たちの住まいの条件がそれぞれ異なるように、キノコも種類ごとに生息条件が異なる。日当たりやよい斜面に生えるキノコもあれば、じめじめとした日陰を好んでコケのそばに生えるキノコもある。それぞれが自分たちにとってよい条件の場所を選んで生息している。キノコを見つけたら、周辺を見わたし、どのような条件があつてここに生えているのか、考えてみると想像が広がる。

山はすがたを変える

10月になり、雲ひとつない晴天に誘われるようにして、観察に行く。今日はどんなキノコと出会えるのだろうか。期待しながら、うら山への入り口がある「うぐいすホール」の近くまで歩く。うら山への入り口には、前に観察に来たときには目立たなかった、ススキが生い茂つていた。足下の草や枝に注意しながら山のなかへ入つていくと、先頭で歩いていた私はクモの巣に絡まつた。

7月下旬にたくさんのキノコを見つけた、森のなかでも日ざしの注ぐ場所へと向かう。その場所に着くと、朽ちた倒木のみが残されておき、鮮やかに輝いていたキノコたちはすがたを消していた。倒木は、どこか寂しげに見える。木の分解が進んだことでキノコたちは役割を終え、すがたが見えなくなつてしまったのだろうか。

奥へ進むと、以前の観察で見つけたコフキサルノコシカケだと思われるキノコをふたたび発見した。厚さが薄くなつていて、見ただけでも乾燥しているのが分かる。もろくて、今にも消えてしまふそうだ。鮮やかさはなく

なり、木に似た色に変化していた。私が夏休みを満喫しているあいだも、木の分解をしつづけていたのだろう。キノコは短い期間ですぐたを消してしまう。

身近に潜む

うら山だけでなく、私たちの生活の身近な場所でもきのこを探してみることにした。本学2号館近くにある大きな木には、サルノコシカケの仲間が生えている。森のなかでも見たことがないほどの大きさだ。木を見上げ、目を凝らすと、その存在が確認できる。木にずつしりと密着し、静かに私たちの生活を見守つてくれているようだ。学内では他にも、切り株に大きなサルノコシカケの仲間が生えているのを見つけた。うら山へ観察に行きはじめから、今まで気づかなかつた発見ができるようになった。

うぐいすホールの近くにある栗山球場でも、種類の異なるキノコが寄りそつて生えているのを見つけた。クリーム色をした笠が広い大きなキノコの隣には、笠が茶色くて丸く、笠の表面に斑点の模様がついたテングタケと思われるキノコも生えている。気づいていな



コフキササルノコシカケだと思われるキノコの変化のようす。キノコはすっかり色あせて、数が減っている
(左：2023年7月20日、右：2023年11月4日)

いだけで、じつは人間の生活に近い場所には
たくさんキノコが隠れている。

うら山を住処とするものたち

観察を重ねていると、うら山に生息する生
きものたちとの思わぬ出会いもある。ある日、
足下に転がっているクリやドングリに魅了さ
れながらうら山を歩いていると、開けた場所
で小さなバツタの大量に出会った。飛び跳ね
るバツタたちを、踏まないように注意してい
ると、カマドウマもいることに気づく。都留
に来てから小さな虫への耐性はついたが、い
まだに大きなカマドウマは見慣れていないの
で、思わず声が出てしまう。

別の日には、体長15センチほどの大きなヒ
キガエルに出会った。斜面の落ち葉と同じよ
うな体の色でじつとしていたため、気づかず
に通り過ぎてしまうところだった。その後、
カエルを捕食中のヘビにも出会った。表面に
赤い斑点の入った野生のヘビは、口を大きく
開けて、ヒキガエルを飲み込もうとしている。
食事中の野生のヘビと出会ったのは、はじめ
てだ。恐ろしいというよりも嬉しい。

野生の生きものたちとの出会いで、うら山

に豊かな自然が広がっていることを実感でき
た。生きものたちが生活できる環境を作るた
めには、生態系を支える存在が必要だ。倒木
や地面から生え、森と共存しているキノコの
すがたを観察することで、キノコが担ってい
る重要な役割を理解できた。

* * *

今までキノコは種類が多く、さまざまな色
や形があるということしか知らなかった。キ
ノコの「生態系を支える」という役割を言葉
として知り、じつさいにその役割を果たして
いる現場に行ってみる。すると、本来の役割
を担っているキノコのすがたを間近で見ると
けでなく、キノコが支えている周りの環境に
も目を向けるようになった。そして、キノコ
が森のなかや私たちの生活に近い場所で、周
りの自然と関わり合いながら生きていよう
すが見えてきた。キノコがうら山の環境を支
えているから、生きものたちの生活は守られ
ている。キノコの働きのおかげで、うら山の
豊かな自然が保たれていることに観察を通し
て気づけた。

根本菜桜（比較文化学科1年） 文・写真

センサーカメラが 写した動物たち

『フィールド・ノート』編集部では、キャンパス内の森にセンサーカメラ（赤外線を感知すると自動的にシャッターを切るカメラ）を設置して動物の生息調査をしています。今回は、ムササビの森のなかに4か所設置しました。10月から11月にかけて撮影された動物を紹介します。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真



動物たちがうごきます!?

QRコードを読み取ると、センサーカメラの録画機能で撮影された動画を見ることができます。動物たちの動くすがたや息遣いなど、ふだん味わうことのできないようすをお楽しみください。

このQRコードからは、野ネズミが走る動画をご覧いただけます▶



ニホンジカ

2023年10月31日



オスのシカが、木の枝にツノを力強くこすりつけています。これは、ツノをおおっている外皮を取りのぞくための行動という説もあります。秋に森に入ると、その痕を多く目にします。



ニホンジカ

2023年11月15日



1頭のメスのシカが現れました。カメラのほうへどんどん近づいてきて、においをしきりにかいています。大きな目や耳を間近に見ることができました。その奥から、もう1頭すがたを現しました。



ニホンジカ

2023年11月18日



1頭のメスのシカが木の根を飛びこえていきます。そのあとに1頭が続いたと思ったら、さらにもう1頭が現れました。合計3頭のメスのシカが、斜面の向こう側へとすがたを消しました。



タヌキ

2023年11月18日



シカが飛びこえた木の根を、タヌキは下をくぐって通り抜けます。ふさふさの毛並みとしっぽが見てとれます。ゆっくりとした足取りで歩いていきました。向かうさきに何かがあるのでしょうか。



日中は、小さな子どもが遊ぶようすが見える。夜は鹿が山から降りてくるそうだ(2023年12月2日)

集り、憩う〈前編〉

タイニーメニー
「Cafe&Dining tinymany」は、今年の6月に「田原交流センター nicot」の1階にオープンした。気になって足を運ぶと、開放的であたたかな空間が広がっていた。この場所についてもっと知りたい。そう考えた私は、代表の黒澤駿さんくろさわしゅん(30)にお話をうかがうことにした。

森のカフェ

店内に入ると、大きな窓に目を奪われる。ガラスいっぱい、だいたい橙色の芝生と深緑色の山が切り取られていた。いつも見えている山がいつそう美しく見えるのは、窓枠の黒が緑を引き立たせているからだろう。夏に來たときは緑が多かったが、今は黄色と橙色の葉っぱに変わった。もう秋になったのか、と時の流れの速さに驚く。都留を囲む山も、まばらに黄色く色づいてきている。空気が澄み、日が落ちると夜空の星が輝いてみえる日が増えてきた。

ぼかぼかした日が差しこむ、いちばん窓ぎわの席に腰をおろす。机や家具にも植物が飾られているのを見つけた。こちらの植物も、季節にあっている。どうやら、季節にあわせて置くものを変えているよう。木と植物に囲まれていて、カフェ自体が森のようだ。お話をうかがった黒澤さんは、本学の卒業生だ。今は「tinymany」の代表をし、キッチンカーとカフェの経営をしている。もともとアウトドアが好きな黒澤さんは、学生時代に都留の自然に魅せられたそう。美しい山や

星空、空気といった都留の豊かな自然を感じてほしいという想いから、店内でも自然を楽しめる工夫をした。どの席に座っても植物が目に入るよう設計したり、都留の木を使って机や棚を作ったりしたのも、そのためだ。あらためて店内を見回すと、木のぬくもりを感じる。机をひと撫ですれば、注がれたあたたかな想いに触れた気がして、なんだか心かぼかぼかした。

どんな人も過ごしやすく

カフェにはたくさんのお客さんが来る。ある日は作業服を着た男性や大学生らしい人が、またある日は、赤ちゃんを連れた女性たちが会話と食事を楽しんでた。カフェの四角い木のテーブルはどれも同じデザインのため、好きなように動かして大きなテーブルとして使うことができる。席の隣にベビーカーを置いても食事をする空間が十分に取れるため、ゆったりと過ごせるのだろう。また、カフェの隣に地域のお子さんを預けられる「子育て支援センター」があるため、お子さんを連れていきやすい雰囲気になっているのかもしれない。

メニューには、お子さまランチや食べごたえのあるランチ、濃厚で美味しいスイーツがそろっている。夜になるとお酒の提供が始まり、22時までダイナー限定の料理を楽しむことができるそうだ。

さまざまなお客さんに配慮されているんですね、と私が言うと、黒澤さんは「ダイニングって、人が集まって、ご飯食べるじゃないですか。ここもそんな風になればいいなと思って」とおっしゃる。子どもから大人まで、どんな人でもくつろいでほしいという願いが、このカフェにはこめられているようだ。

はじめてのジビエ

カフェだけではなく、キッチンカーでも売られているジビエサンドを食べてみた。ジビエ(※)のなかでも臭みが少ない鹿肉を使ったホットサンドは、とても食べやすい。ピクルスの酸味とマスタードのまろやかな辛味、鹿肉のうまみが口いっぱい広がる。サクッと焼き上げられたパンのさりげない存在が、具材の味をひき立てているようだ。

山梨は鹿の増加が問題になっているそう。野生動物が増えすぎると、農作物が荒らされ

たり、車と衝突してしまったりする。このような獣害の問題をお客さんに知ってもらいためにも、ジビエ料理を提供しているという。鹿は食べられない貴重な存在だと思っていた。しかし、ジビエサンドに出会って、はじめて鹿肉を食べる文化があることを知った。

じつさいに食べたことでおいしさに気づき、他のジビエも食べてみたくなった。今までなら思いもしなかったらう。カフェに出会ってから、私の世界がほんの少し広がっている。



「Cafe&Dining tinymany」は、季節のうつろいを味わえる自然豊かなカフェだった。誰もが集うことを目標に、子どもから大人まで利用しやすい工夫がなされている。提供しているメニューは美味しいだけでなく、獣害という地域にかくれた問題を教えてくれた。都留で人が集まり、都留と向きあう場所として、このカフェは存在しているようだ。

カフェが出会いと会話を生み、キッチンカーが都留の魅力を外へ発信する。黒澤さんは、多くの人が都留を知り、都留で活動する

きっかけを作りたいのだそう。私はこのカフェを知ったことで、都留のお店や行われているイベントを知ることができた。「私がかきかけを作っていたいただいた第一号ですね」と言うと、黒澤さんは目を細めて笑った。

カフェに興味を持って始めた取材だったが、お話するうちにカフェの経営に力を注ぐ黒澤さんにも興味湧いてきた。なぜそれほど都留を愛し、都留のために活動するのか。活動の原動力は何か。気になることばかりだ。次号では、黒澤さんご自身のお話をうかがっていく。

高橋美唯(地域社会学科1年) 文・写真
原口桜子(学校教育学科2年) 写真



店内で食べられるランチセットは、サラダとドリンクがつくためより満腹感がある(2023年12月2日)

夜の生きものを観る

秋が近づく夜の森

前号では、カワネズミの観察をするために夜の森へ向かった。そこには、まちなかとは異なった空間が広がっていた。夜に生きる生きものにより近づきたいと思った私は、北垣先生とともにふたたび東桂の湯の沢にある旧養魚場を訪れることにする。

浅井祐吉(学校教育学科2年)=文・写真

前回よりも多くのカワネズミを観てみた。そう思い、まずは8月25日に観察をおこなった。川沿いに腰を落ろし空を見上げると、緑のモミジの隙間からふたつの星がのぞいている。どこからかジーンと虫の音が聞こえた。昼はまだまだ夏まつさかりなのに、夜は秋の足音が聞こえてくるようだ。

19時50分、以前の観察でカワネズミを見た時間になった。同じ時間にカワネズミが現れるわけではないとはわかっているもの

の、今までより前のめりになって流れを見つめる。すると目の前をふわりと白い何かは横切った。カワネズミかと驚きで体が震えたが、残念ながらがであった。

それからまた変化のない時間が続いた。対岸にいる北垣先生のほうを見ると、すぐ後ろで青白いふたつの光がふわふわ漂っている。見間違いだろうか。一度、目をつぶる。ふたたびまぶたを開けたとき、その光はなくなっていた。しかし、しばらく経つと、ふたたび同じ場所に青白い光が現れた。2、3秒光ったかと思うと、ふと消えてしまう。いったい何だろうと怖くなる。すると突然、ジーンと虫の音が響いた。ブザーのようにピンと張った音だ。驚いて声が漏れそうになる。時間にすれば30秒ほどであったが、ずっと鳴り続けるのではないかと思うほど長く感じた。

カワネズミは現れないまま、観察を終える時間になった。駐車場に向かう道すがら、北垣先生に先ほど見えた青白い光の話をする。「たぶんシカじゃないかな」。その言葉に張りつめていた力が抜け、手に持っていたライトを落としかけた。光の正体は、シカの両目だったのだ。「シカですか」「そう。危害を加える



川のなかに石を積むことで、カワネズミがその上を通ったのがわかりやすくなる(2023年9月28日)



左の写真の昼間のようす。秋が深まり、積んだ石に落ち葉が引っかかっている(2023年11月22日)

ことはないと思うよ」。そのような会話を交わしながら森を抜けた。

夜に生きる生きものたち

次に観察に訪れたのは、それから1カ月後の9月28日だった。この日は最高気温が34度と、夏が帰ってきたような暑さだった。どのような服装にしようか悩んで、春先に着ていた厚手のパーカーを用意する。

観察を始めたのは、19時を少し過ぎたあたりだ。それから30分ほど経ったころ、上流に何やら動く影を見つけた。ライトを向けると、5センチほどの小さな魚が浮かび上がる。魚を見るのは夜の森でははじめてだ。カワネズミは魚や水生昆虫を食物としているため、今晩は見られるかもしれないとワクワクする。

5分ほど経ったころ、下流にある岩場を小さな動物が走った。野ネズミだ。小走りで岩場を移動する野ネズミは、器用にすりとその隙間に消えていった。川に目を戻すと、ふたたび魚が泳いできた。しかも2匹いる。あちらこちらに動く影にライトを合わせていると、もうひとつ魚の影が増えた。10センチはあるだろう。

ライトで照らしながら、今日はよく生きものをみると呟くと、北垣先生に「それは夜の森に慣れてきたからだよ」と言われた。たしかに前号も含めて6回ほど夜の森で過ごし、得体の知れなさを感ずることは少なくなっていた。観察のしかたはほとんど変えていないのに、慣れてきたというだけで、こんなにも観察できるものが増えるのだろうか。今までの観察で、私はたかさんの生きものたちを見落としていたのかもしれない。

そのようなことを考えていると、観察を終える時間まであと10分になっていた。今日は



岩の隙間に作られたネズミの巣はいろいろなところへつながっているという (2023年9月28日)

見られそうだという予感の外れたかと肩を落とす。そのとき、下流から小さな丸いものが川のなかに積まれた石をピュッと越えていった。あわててライトを上流に向ける。銀色のかたまりに光が反射した。かたまりは一度橋台にぶつかると、川の向こうへ行ってしまった。「今のカワネズミだったね」北垣さんに声をかけられる。「前より小さかったですよね」「たぶん子どもかな」。ずっと待っていたカワネズミを見られて嬉しいはずだが、やけに冷静だった。もう今日の観察は終わりだと油断していて、実感が湧きにくかったからかもしれない。

カワネズミの泳ぎかた

10月16日は、昼間でも長袖がちょうどよい一日だった。夜は冷えると考え、冬用のダウンジャケットを着る。19時に観察を始めてわずか5分後、カワネズミが上流から現れた。泳ぐというより、川の流れに身を任せているように見える。小さな丸いからだをしなやかに動かして、石のあいだを潜り抜けていく。カワネズミは足を伸ばせば届きそうなほど近くを通っていったが、突然のことに目で追う

ことしかできなかった。今までの観察から推測すると、カワネズミは30分ほどするとまた戻ってくる。またカワネズミが見られるかもしれないと、はやる気持ちを落ちつかせながら水面を見つめる。

新たな一面と出会う

それから20分が経ったところ、下流のほうでふたつの銀色のかたまりが動いた。流れを気にすることなく自由に川のなかを行き来している。まるで仲良く遊んでいるようだ。カワネズミだろうか。判断できずにいると、そのうちの1匹が目の前を通り抜けていった。「今のもカワネズミだね」。そう北垣先生に言われた。やはりそうだったか、と写真を撮り損ねたことを悔しく思う。しかし、カワネズミが川の流れに関係なく自由に泳いでいるのははじめて見た。カワネズミの新たな一面を発見できたようで少し誇らしくなる。

まだ観察を始めて30分も経っていないのに、カワネズミに2回も出会えた。これも、夜の森に慣れてきたからなのか。それとも、たまたま今日だけカワネズミがよく現れるのか。ふと日没が早くなっていることに気づく。

カワネズミの活動する時間と、日没の時間にはなにか関係があるのだろうか。

それから10分して、今度はカワネズミが上流から現れた。先ほど通って行ったのが戻ってきたのだろうか。今度こそはカメラを構えていたが、シャッターが間に合わないほど素早い身のこなしだった。それからまたカワネズミを待つが、いつ現れるかわからないので、川から目を離すことができない。メモを取るのもひと苦労だ。

川を見続けていると、対岸を小さい何か走り抜けていった。今度こそは撮影しようとしてレンズを向けるが、どうやらネズミだったようだ。小さく息をつき、空を見上げる。急にザアザアと川の音が鮮明になった。ぐるりとまわりに注意を向けると、虫の声や上流から運ばれてきた風の冷たさに気づく。今日は、はじめからカワネズミを観察できたことでそわそわしてしまい、落ちついて夜の森を見ていなかったようだ。

意識を向けるものを変えるだけで、感じられるものがこんなにも違うのかと、不思議な気持ちになる。同じ観察方法でも景色が変わることに、少し胸が高鳴った。

* * *

私は半年かけて夜の森へ何度も訪れた。はじめは恐ろしげで何も見えなかったが、だんだんと川の音や森の匂いを楽しむ余裕が出てきた。そして今号では、夜の森に慣れ、意識を集中させることで、夜の生きものたちのすがたを感じられるようになった。じつさいに何度も訪れ、時間をかけて向き合うことで、ふだんは気にも留めないことと出会うことができるのだろう。



観察を終え、駐車場に戻る途中に少し欠けた月が見えた。まるでおとぎ話のなかにいるようだ（2023年9月28日）



学びから育つ 幹と枝葉

なかむらみさお
中村操さん(71)は、喫茶店「バンカムツル」のマスターだ。大学の授業が終わってお店を訪れたさい、壁に新聞記事が貼ってあることに気がついた。それは中村さんがコーヒーの勉強のために海外に行ったことに関する記事だった。いったいどのような経験をされてきたのだろう。



カウンターに立つ中村さん。やわらかい表情とコーヒーの湯気に、気持ちがあたたかくなる(2023年12月6日)

バンカムツルへ

8月下旬、お店を訪れると、中村さんが優しい笑顔で「いらっしやい」と迎えてくださった。テーブルにつき、マスクを外すと、コーヒーの香りが鼻の奥に広がる。お店自体にしみ込んでいるような、濃くて落ちつく香りだ。店内を見わたすと、4人掛けのテーブルとカウンター席が3つずつ並んでいる。この日はカウンターに女性のお客さんが座っていた。中村さんとなごやかに談笑している。

さつそくチョコレートケーキとカフェオレを注文した。口のなかで溶けていくチョコレートをゆつくりと味わう。カフェオレを飲むと、生クリームの甘さのあとにコーヒーの酸味が追いかけてくる。コーヒーの風味がおいしいと感じられるカフェオレは今まで飲んだことがない。

中村さんはこのコーヒーにどのようにしてたどり着いたのだろう。

コーヒーとの出会い

中村さんは26歳のころ、コーヒーの勉強を始めた。以前はコーヒーについて知識はなく、

特別好きでもなかったという。それでもコーヒーを学ぼうと考えたのは、友人から焙煎が難しいと聞いたからだそう。難しいことにこそ挑戦しよう、と中村さんは一念発起する。

本屋でコーヒーに関する雑誌や専門書を買ひ込み、全国の喫茶店に足を運んだ。しかし、おいしいコーヒーの淹れかたをお店の人に教わることはしなかったそう。中村さんは、淹れかたを知ったとしても、自分の口で感じ取れる以上のおいしさを作ることはできないと思ったという。

私だったら淹れかたを教わって、はやくおいしいコーヒーにたどりつこうとするだろう。自分の味覚を信じておいしさを追求するすがたに、中村さんのこだわりを見ることができた。

元をたどる

日本各地の喫茶店をまわった後、中村さんは海外へとわたる。私が興味をもっていた話だ。すかさず海外へわたった理由を尋ねた。すると中村さんは、「元をたどるため。いろいろな勉強方法があるけど、自分はそういう風に勉強する」と、迷いなく答えた。元をた



淹れていただいたコーヒー。苦味だけでなく酸味もあることに気がついた（2023年10月18日）

どるとはどういう意味だろう。中村さんはよく理解できていない私に、「学びの根本にあるものを理解することが大切」と説明してくださった。それは、何かを学ぶとき、なぜ学ぶのか、何のために学ぶのかを考えることだという。

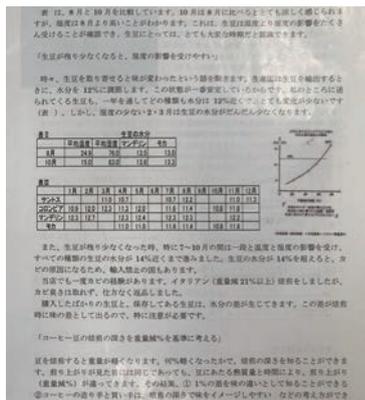
中村さんはコーヒーの元をたどるため、最古のコーヒーであるモカコーヒー（※①）を学んだ。エチオピアとイエメンにそれぞれ10日ずつ滞在し、畑での栽培や豆の焙煎方法などを自分の目で確かめた。勉強の根本にあるものを知るために外国に飛び出す。私には想

像もつかないことだ。

エチオピアでは、各家庭で火を起こし、生のコーヒー豆を煎り、ジャバナという道具で抽出してコーヒーを作る。そのため一杯のコーヒーを淹れるのに2、3時間かかるそう。たった一杯が出来上がるのにこれほどの作業が必要だなんて、なんだかじれつたいように思える。しかし、この行程があるからこそ、一杯を大切に味わうことができるのだろう。次はコーヒーを頼んでみようかなと思いつながら、ふたたびカフェオレに口をつけた。

学びとの縁

「君たちに質問です。明日はあると思いませんか」と、中村さんがおっしゃった。いきなりの質問で言葉に詰まったが、「あると思います」と返した。すると中村さんは「それは常識にとらわれているよ」と笑った。頭のなかが疑問符でいっぱいになる。「明日はあくまで過去をたどった延長線上にあるものだから、明日があるというのはいちい込み」と中村さんはおっしゃった。積み重なってきた過去があるからこそ、明日がうまれるということだろうか。



『コーヒー文化研究』の一部。コーヒー豆の焙煎がデータに基づいていることが分かる（2023年10月24日）

中村さんにとつての過去とは、自身の経験だけでなく、今までコーヒーと向き合い続けてきた先人たちの功績もさしている。だから過去から学ぶのだと中村さんは言う。

お話の途中、中村さんはカウンターから一冊の冊子を取り出した。表紙には「コーヒー文化研究」とある。中村さんご自身が書いたものだそう。開いてみると、コーヒー豆の写真とともに、理科の実験で使うような表やグラフがいくつも載っている。理系科目が得意ではない私は、思わず顔をしかめた。

中村さんの説明によると、コーヒー豆の季節ごとの水分量や積算温度（※②）に関するデータが掲載されているそうだ。焙煎は、豆の種類や空気中の湿度に合わせて行うため、このデータが役立つという。

※①イエメンのモカ港から豆が輸出されていたことがその名の由来となっている。対岸のエチオピア産のコーヒー豆も一緒に輸出されていたため、エチオピア産のコーヒー豆もモカコーヒーと呼ばれている



難しいですねと言うと、中村さんは「そんなことないよ。数学や英語や理科、どれも今まで学校で学んだこととの縁だよ。(学んだことは)絶対に役に立つから先人たちもやってきた」と、力強くおっしゃる。今まで学校で習ってきたことがどのように生きてくるのか、想像がついていなかった。「学んできたこととの縁」がこの先現れるかもしれないと思うと、学びが無駄になることはないのだと確信することができた。

「幹」と「枝葉」

中村さんは、お店の入り口付近に本誌の過去号を置いてくださっている。編集部員がよくバンカムツルに来ることがきっかけだったそう。「いつも見守ってくださいありがとうございます」と頭を下げると、「見守つてるとかそんなじゃないですよ。学んでの」と意外な言葉が返ってきた。私たちの記事が学びの元になると考えると、自然と背筋が伸びる。

続けて中村さんは、「皆さんもいろんなことを経験すればいいよ。幹から枝葉は広がっていくんだから、よいことも悪いことも、勉

強もなんでもすればいい。自分のなかで幹になるものさえ持っていれば」とおっしゃった。中村さんにとつて幹や枝葉とは何なのだろうか。中村さんは、答えになっているか分からないけれど、と前置きしてからこうおっしゃった。「みんなと違う自分、良い面だけじゃない悪いところもある自分。そんな多面的な自分を受け入れること」。「幹」が色々な面を含んだ自分のことを、「枝葉」がそんな自分が経験していくさまざまな出来事を指しているようだ。



カウンター席のお客さんと話す中村さん。身振り手振りを使って楽しそうに話している (2023年10月18日)

私はよい自分、立派な自分ばかりを目指そうとして、上手くいかずに挫折することが多い。中村さんのお話を聞いて、そのような自分も受け入れていいのだとほっとした。

* * *

中村さんのゆつたりとした話しかたやコーヒーを淹れるすがたを見て、最初は物静かな印象を抱いていた。しかし、お話を聞いていくうちに、難しいことにこそ挑戦してきわめようとする中村さんの活力にあふれた一面を知ることができた。勇気が出なくて失敗を避けようとする自分とは正反対だ。だからこそ、中村さんの考えや歩んできた道のりをたくさん教わりたくなった。

経験と学びを重ね続けてきた中村さんからは、私の想像がおよばないような話が広がることもあった。しかし、中村さんのように、いろいろな自分を認め、多くの経験を積んでいくことで、中村さんのお話が自分と重なるときがきつとくるだろう。「幹」を太く、「枝葉」を広く育てたい。中村さんとのお話は、目指したいものを見つけるきっかけとなった。

横山幸乃 (国文学科1年) 文・写真

tokidoki
その時々を
大切に

2023年4月、「バンカムツル」の2階に「tokidoki / 発酵食堂」が開店した。高校時代に体調をくずすことが多かった私は、体にいい発酵食品を提供していることにひかれ、昼食を食べに行くことにした。



笑顔でお話してくださる希さんに、会うたび元気をもらっている（2023年9月27日）

てまひまをかける

「tokidoki / 発酵食堂」は、その名の通り発酵食品を使った料理を提供する予約制のお店だ。蒸し料理を中心に、自家製の豆腐や糀を使った食事を提供している。

切り盛りするのは杉本希さん（36）だ。カットソーの上に「tokidoki」と刺繍が入ったエプロンという飾らない格好が、質素で落ち着いた店内に溶け込んでいる。

お店に入ると正面にメニューが書いてあり、主菜は甲州地鶏と富士湧水ポークから、お米は白米と黒米の2つから選ぶことができる。今回は甲州地鶏と黒米を選んだ。せいろを開けると野菜とお肉が並んでいる。蒸されたことで、野菜の色を強く感じる。食べてみると野菜やお肉が甘い。食材の甘みだけで食べられそうだ。蒸すとこんなに美味しくなるのかと思う顔がほころぶ。そこに自家製のタレをつける。4種類あるタレは、食材の甘みと調和していて、どんだんごはんが進む。とくに私が気に入ったのは茶わん蒸しだ。豆腐の上にはあんかけと生姜が乗っている。東北地方で冬至の日に食べる茶わん蒸しだそ



シンプルなのに何度も食べたくなるごはん（2023年10月17日）

うだ。一口食べればあんかけの優しい甘みと生姜でじんわりとからだが温まる。

小鉢は季節や気候によって不定期で変わる。今回は自家製の葛ゴマ豆腐だ。週のはじめに食材を見て「今週はこれでいこう」と決めることも多いそうだ。メニューが変わらないときは、常連さんの小鉢だけ違うものにすることもあるという。毎回の食事を楽しんでほしいという気づかいが行き届いている。

希さんの料理は、食材が持っている甘さやうまみが最大限に引き出されているように思



う。調理方法がシンプルだから、食べても胃が重たくならない。だからこそ何度も食べたくなってしまうのだろう。ふだん私がつくる料理は調味料がないと成り立たない。同じ食材でも、てまひまをかけると美味しくなるのだと気づかされた。

食材と向き合う

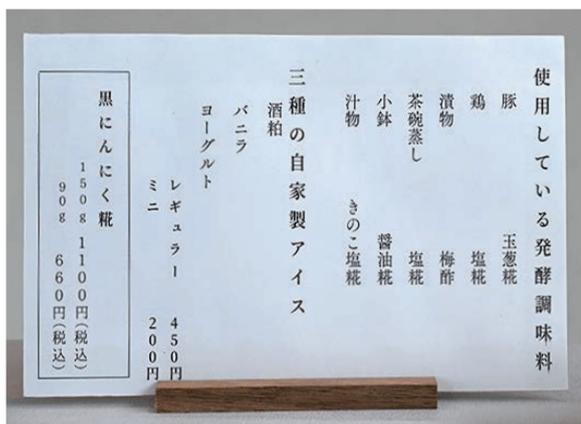
希さんは調理方法や味付けだけではなく、食材にもこだわっている。都留市や周辺地域で生産されたものを中心に使い、地産地消を目指している。野菜の多くは、カフェのワークショップで知り合った「はのさち農園」や友人が運営する「フォレストアイランド」という農園、マルシェで友人を通じて知り合った「浅田農園」から仕入れている。いずれも都留市の農家さんだ。足りないものは都留文科大前駅近くの農協の直売所で調達する。出荷している農家さんたちが「ちよつとこれ（もう古いから）下げちゃつて」と新鮮な野菜にこだわるようすがいいのだと、農家さんの身ぶりをまねながら説明してくれた。

希さんは農家のみなさんが熱心に野菜づくりに取り組んでいることをいきいきと教えて

くれる。そのすがたからは、食材への愛情や真摯に向き合うことで生まれる熱が伝わってくる。現在の蒸し料理も、いくつかのメニューを試したすえにたどり着いたものだ。希さんは開店後も使う食材を吟味し、季節に合った食事をお客さんに届けている。

人生の転換点

希さんはもともとアパレル関係の仕事をしてきた。しかし、事務職に転職したさいに環境のストレスから体調をくずしてしまつた



料理に使われている糀が書かれたおしながき。糀は低温調理器に6時間ほどかけて完成するそうだ（2023年10月31日）

という。そのときに注目したのが発酵食品だ。からだにいい食品と話題になっていたことと、もともとぬか床を持っていて馴染みがあったことから、毎日の食事に発酵食品を取り入れはじめた。するとからだの調子がどんどん改善したそうだ。しだいに希さんは、1日3回の食事ですりだけ体がいいものを食べられるか工夫するようになった。体調をくずすというマイナスなできごとが、希さんの人生の転換点になったのだ。

バンカムツルの存在

希さんのご両親は、1階のバンカムツルを営む中村さんご夫妻だ。ももとは2階もバンカムツルだった。しかし、母親の葉子さんが2階に上がるのが大変になったことをきっかけに、希さんが2階の一部を間借りするかわりで、新たにお店を構えた。

希さんはもともと料理人だったわけではないため、当初は自分の料理に説得力がないと感じていた。そこで「一度始めたら、やりきらない」とと本や通信講座で勉強し、発酵食品と薬膳に関する資格を取得した。それでも、長年愛されてきた場所でお店を開くことには



店内のようす。壁が3面ガラス張りになっていて、食事とともに山並みや四季の移ろいを楽しめる（2023年10月31日）

プレッシャーがあつた。ご両親にお店を開きたいと打ち明けると「本当に続けられるの?」「大変だよ」と引きとめられたという。もちろん希さんも長年お店を営んできた二人を見ていたから、お店の経営が大変であることは十分わかつていた。それでも「一度都留でお店を始めたら、やめるなんてぜつたに言えない」。そんな覚悟とともに開店を決意した。希さんの語りからは、緊張や不安だけでなく、難しいことに挑むことへのワクワクが伝わってくる。過去の挑戦が、今では経験となつ

て希さんを支えているのだろう。重圧や不安も自分のエネルギーに変えてしまう強さを感じた。

父親の操さんは希さんにとってどんな存在かと聞くと、「偉大な存在」とすぐに答えるが返ってきた。そのようすから操さんに対する尊敬の念が伝わってくる。長年コーヒーを追求してきた操さんの背中が、たしかに大きく見えることだろう。開店前は操さんがいけばんの壁だと感じていて、最後まで料理を食べてもらふことが怖かつたそう。しかし開店の数日前に操さんに料理を食べてもらふと「うまいじゃん」と褒められ、早く食べてもらえばよかつたと安心したという。今ではご両親とも知り合いにお店を紹介してくれるそう。うだ。「いいと思つたものしか伝えない人だから、紹介してくれるということは二人に認めてもらえたのかな」と希さんは話した。

希さんの信念

店名の「tokitoki」には、「その時々々の季節に合った料理を出す」「時々休憩しに来てもらえるような、ほつとできる場所にしたいたい」という意味のほかに、「目の前の一瞬を大切

にしてほしい」という意味合いがある。希さんは「やらなきゃいけないことより、やりたいことをやってほしい」とおつしやつていた。それは無責任なのではなく、自分の心に正直に生きるということだ。

今の自分が何をしたいのかを問いかけて人生を進めていく希さんの生きかたからは、覚悟のような強さを感じる。直感や歩んできた道を大切に思っているからこそ、そうした覚悟をもつて大きな決断ができるのだろう。

* * *

希さんには、自分の気持ちに嘘をつかない誠実さ、好きなものへの追求心、やりたいと思つたことを本当にやりとげてしまう粘り強さがある。そんな希さんを私はかつこいと思つた。やりたいことができたなら、自分の置かれた状況にいいわけをせず、自分の力で、進みたい道を歩んでいく。人生は一度きりだから、後悔のないようにその時の自分に正直でいたい。その時々を大切にしよう、そう思える人生の先輩に出会えた。

谷上碧（地域社会学科1年） 文・写真
久永奈央（地域社会学科1年） 写真



学び続ける、挑み続ける

「バンカムツル」のマスターとして
美味しいコーヒーを追求する中村さん

この地で育った食材を使い
季節にあった食事を届ける「tokidoki / 発酵食堂」の希さん

同じ建物でそれぞれのお店を営む親子

それぞれ想いを注ぐものはちがっても
やりたいことを追いかける行動力
ひたむきに向き合い続ける、たしかな志を持っていました



写真をお願いすると快くポーズを決めてくれた、中村さんと希さん。中央の引き戸が「バンカムツル」の入り口、そのとなりにあるのが「tokidoki / 発酵食堂」へと続く階段だ（2023年12月5日）

都留の風景写真集

— いすを撮る —

厳しい暑さも遠くへ去っていき、秋風がさわりと肌をなでます。高い空のした、いすやベンチに腰掛けると、いつもより少しゆったりとした時間の流れを感じました。

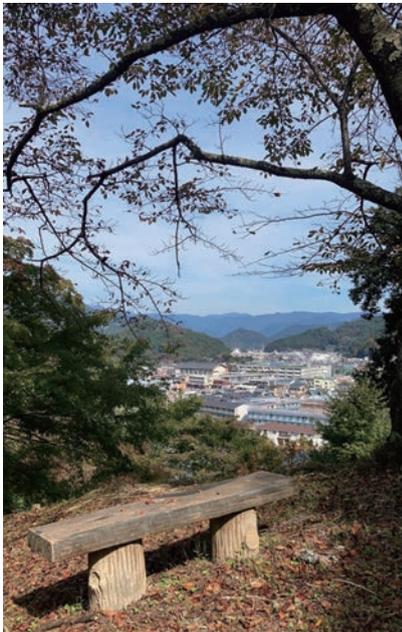
横山幸乃（国文学科1年）・原口桜子（学校教育学科2年）＝文・写真



フィールドノート編集室前のいすでひと休みするカエル
@本学4号館前（2023年7月28日）



背もたれに書かれた数字の並びに、法則を見つけたいくなる
@都留市田原（2023年10月24日）



都留のまちを見下ろしている木陰のベンチ
@楽山公園 (2023年10月19日)



なぜ坂道にイスが置いてあるのだろう
@夏狩 (2023年10月30日)



球場のベンチのように横一列に並んでいる
@仲町大神社横の公園 (2023年11月1日)

FIELD NOTE

no. 115 Dec.

発行人

北垣憲仁

統括編集者

西教生

編集長

原優希 (32-34,54,55)

渡邊結佳 (1,2-3,8-10,20-21,55,56)

編集

浅井祐音 (38-39,42-44)

原口桜子 (6-7,14-16,22-23,40-41,52-53)

村井開 (4-5,27-29,30-31)

印南響 (24-26,38-39)

北原日々希 (4-5,17-19,20-21,27-29,30-31)

高橋美唯 (2-3,40-41)

谷上碧 (1,48-50,51,56)

根本菜桜 (22-23,35-37)

久永奈央 (6-7,11-13,48-50,54)

横山幸乃 (45-47,51,52-53)

ロゴデザイン

工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELDNOTE (フィールド・ノート) 115号

発行日: 2023年12月22日

発行部数: 1000部

発行・編集:

〒402-8555

山梨県都留市田原 3-8-1

都留文科大学地域交流研究センター

『フィールド・ノート』編集部

E-mail:

fieldnote.2020@gmail.com

編集後記

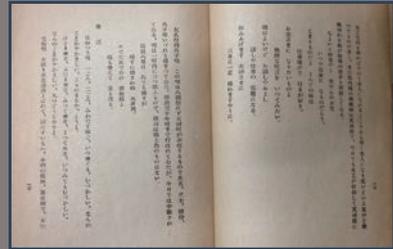


ふるさとの言葉

しゃかいで共通だと思っていた言葉が、都留に来て通用しないと分かり驚きました。私のいちばん好きな方言は、「ぶんず色」です。どじな私はよく使っていました。例えば、「足ぶんず色になっちゃった」は、「足が青あざになっちゃった」という意味です。福島では青あざのことをぶんず色と言います。都留で、友だちと方言の話題になり、「ぶんず色って知ってる?」と聞くと、「なにそれ、何色?」と返されるのが面白くてたまりません。(根本菜桜)

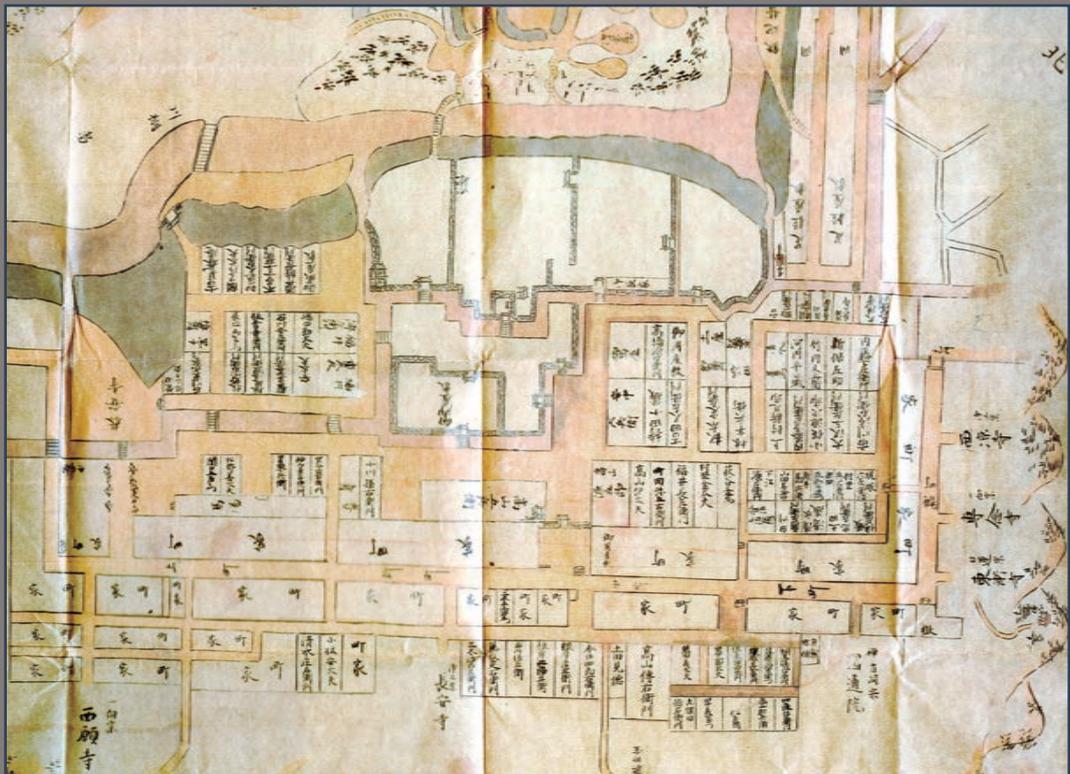
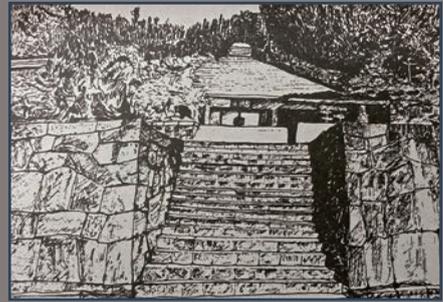
んきょうに励んでいた中高生の頃、離れて暮らしている祖母が勉強のお供にと食べ物を送ってくれていました。あるとき、大きな文旦ぶんたんがやってきました。文旦とは鹿児島名産の柑橘果物のこと。その表面には凛々しい眉が特徴の顔が描いてありました。祖母の力作です。笑いながらうら側を見ると、「キバレ!!」の文字が目飛びこみました。「キバレ」とは鹿児島の言葉で「頑張り」という意味です。今でもあの文旦の顔を思い出すたびに、焦らずに自分の力をだし切ろうと元気が湧いてきます。(久永奈央)

るりいろいろのコーヒーカップを買った帰り道、一緒に出かけていた家族とおしゃべりをしていました。「荷物、うらの席ののっけていい?」と母。「うらの席乗るね」と妹。「だいたいだよ」と父。ふふふ、栃木弁がペラペラと。「都留では通じないんだよ〜」と私が教えると、家族はびっくりしていました。私が好きな方言は「大丈夫」という意味の「だいたい」です。方言と知らない人には「いちだいたい」のことだと勘違いされることも。(渡邊結佳)



古地図を手に 城下町を訪ねる (仮)

2024年3月発行予定



【参考書籍】『谷村民間傳承』 谷村町青年団 1940年 『ふるさとの寺ペン画集』 都留仏教会 2000年

つるを味わう

～食欲の秋～



何か甘いものが食べたいな。冷蔵庫を開けるとさつまいもが入っていた。そうだ、これで大学芋を作ろう。

浅田農園の紅はるかという品種のさつまいもと、みのある養蜂園のミスキ・ケンボナシのはちみつを使う。どちらも「ニコット秋マルシェ」で購入した、都留で育てられた食材だ。

まず電子レンジで加熱したさつまいもを炒めて表面を焦がす。つぎに醤油やみりん、はちみつを混ぜたタレをさつまいもに絡める。仕上げにこまをかけたら完成だ。

「いただきます」。表面はカリッと、なかはホクホクしている食感のちがいが楽しい。たれのしょっぱさのなかにはちみつの甘みがほのかに感じられて美味しかった。

フィールド・ミュージアム

「都留フィールド・ミュージアム」とは？

私たちのフィールドは、特定の地域に固定はしませんが、とくに都留市を拠点として富士山とその山麓、桂川（相模川）流域に注目して活動しています。

名称について：大学だけの取り組みではなく、広く市民と共有し、地域に開かれた交流を育みたいという思いから、「都留フィールド・ミュージアム」という表記を用いています。本学の地域交流研究センターが、この活動を担っています。



地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門

発行日 2023年12月22日（年3回発行）
発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文学大学
地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 『フィールド・ノート』編集部

FIELD・NOTE
no. 115

FIELD・NOTE
2023年 115号
特集「かたらつぷよ」

地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門